

損しているものが多い。胎土・焼成は良好で、その色調は明褐色、赤褐色・黄褐色を呈している。

管状形2点は平安時代の紡錘形土錐と伴出し、明褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

壺状形土錐は後出のもので、胎土に小石粒が入るものの、念入りに成形されている。色調は黒褐色である。

他の包含層出土遺物は、平安時代の土器破片、中世の土師質土器片・陶器片、近世陶器片等があるが、破片のため図示できない。

第5節 植物遺体（炭化種子類）

（第139図、第16表）

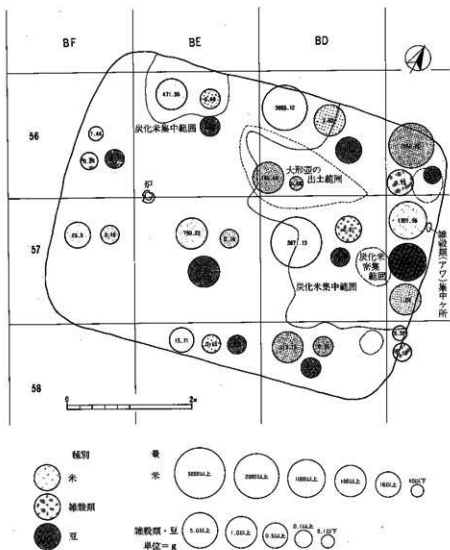
橋原遺跡を代表する出土遺物は第一に59住出土の炭化米ではないだろうか。発見の場所は竪穴東壁付近の覆土中（床上10cm）に散乱していた大形の甕（321）破片を取り上げるときに、その底部の内側に炭化米の塊りが付着していることに気付いたことである。これを契機に覆土に混在する極小の炭化物が米であることがわかり、内眼で見える範囲において、炭化米の集中箇所を記録しながら発掘をすすめたが、炭化米は土の中に混在するといった状況であり（写真28）、一塊りになって、あるいは一ヶ所に集中してすべてが発見されたというのではない。

59住の炭化米出土状況は第三章の2、59号住居の項に詳しいのでここでは説明を繰り返さないが、床上10cmの覆土をグリッド単位にとり上げて炭化物の洗い出しを行ってグリッド別出土量（重さ）を調べた結果、炭化米の小ブロック状の集中が見られた住居北東コーナー付近に多く出土したことを、確認することができた（第139図）。

59住は火災に遭遇した住居である。その時、玄米の状態と相当量の米が屋内に貯えられていたことは事実である。第139図のグリッド別出土量の図化では、炭化した米が北東の主柱穴を基点に、周囲に広がった様子を想起させる。これと土器の出土状況を総合すると、炭化米の集中する範囲内から出土した大形壺（312）と甕（321）に入れられてあった玄米が、火災の中で拡散したということであり、壺の出土状態からすると高所からの転落が推察されるのである。もちろんそれだけで竪穴全体に拡散されたのではなく、埋没の過程で、さらに周囲に広がったのであろうことは、いうまでもあるまい。豆類、雑穀類もほぼ似た状況にある。

さて、59住の炭化種子類は、米・雑穀類（ヒエ、アワ）・豆類であり、出土量は、米が16,301.44g、およそ2斗6升（推定値）である。粒にすると350,000粒（推定値）になる。雑穀類は2100粒（推定値）、豆130粒である。

住居別では、第16表のように38棟の住居址から何んらかの種子類が検出された。これらは大部分が埋壺内の土を水洗いして拾い出した成果である。水洗いの方法は、土を十分に乾燥させてから水槽に入れ、水に炭化種子類を浮かせてオーバーフローさせて集めた。この方法だと、植物体の皮、茎、根、昆虫の遺骸等、所謂ゴミすべてが一所になるため、手作業に



第139図 59号住居址グリッド別炭化種子類の出土量

て炭化種子類だけ拾い出しをしなければならないが、59住のように甚大な量は、大・小の目のフルイを使って選別した。

埋竈炉の土以外から出土した例は以下の通りである。

- 4号住居址 出土土器内底部、雑穀類
- 10号住居址 南西コーナーの袋状ビット (P₅) 内、米 (多量)
- 11号住居址 一括土器内、米
- 18号住居址 地床炉内およびその周囲の焼土内、米と雑穀類 (多量)
- 32号住居址 出土土器 (壺) 内、米と雑穀類

第16表 住居址別植物遺体の種類と出土量 (木片、骨片、昆虫その他を含む)

種類 住居址No	米	表 類	雑 穀 類	豆 類	ク リ、ク ルミ	ナ ラ 属 (ドングリ)	サ ク ラ 属 ブドウ属	ワ ラ、 トケ 枝、 稗など	板 材 表 皮	不 明	そ の 他
3	2		7		12(クリ)			4		多	
4			5					1		22(+)	骨片(K)1
6	19		42		5(ク リ)			1	1	多	昆虫(M)2、K25
7			1							8	K1
10	370		4	4					1	多	K13
11	4										
17	11									7	
18	1685		838				1(サクラ) 1(ブドウ)	33		多	M20、K23
19	2		2	2		3				50	K16
20	3									3	K3
21	4		12					1		61	K2
22	8		4			5				9	K2
28	2	1	12						1	3	K1
29	6		2			1		2		36	K1
32	7		5		5(ク リ) 1(クルミ)		6(サクラ)	3		22	K6
33	13		8			1				10	K13
34					1(クルミ)				多		
35	3		14					5		70	K70、M1
37	7		13							6	炭化(N)1、K2
39				1					28	70	K12
41	1		2							3	K2
43	3		2							7	N4
44			21							1	K6
49					1(ク リ)						
51										2	
53	333	2	121	13		56	1(サクラ) 6(ブドウ)	20	1	炭化米糠 M12、K120	
55	5		1	2						多	
57	17		5					2		5	K5
58	571		18	41				15		多	N317、M4、K375
59	35万		2100	130				63	21	多	N22、M10、K66
60	23										K1
61	9		2		5(ク リ)		5(サクラ)				K8
63	1		1							23	K5
64	314		1	5						7	M1、K2
65	6		8							22	K5
66	5		1					3		27(+)	K3
67	6		4						46	14(+)	K27
68	5		4		1(ク リ)					48	K1
その他	15	1	10						133(+)	49	M2、炭化物糠K2
合 計	353460	4	3270	199	33(ク リ) 3(クルミ)	66	サクラ(8) ブドウ(10)	153	232(+)	多	K763、M52、 N344、他

・重量よりの推定値

- 41号住居址 地床炉の焼土内、米と雑穀類
- 53号住居址 カマド付近の床上
- 58号住居址 床面上の覆土内、米と雑穀類（多量）
- 60号住居址 出土土器（甕、床上）内、米と雑穀類
- 64号住居址 南東コーナーのビット（P₅）内、米（多量）
- 66号住居址 出土小形土器（甕）内、米と雑穀類

なお、4・10・35・58・60・64・66住は埋甕の土器内からも米・雑穀類ともに検出されている。

53住は床上に「おむすび状」の塊りとなって三ヶ所に散乱した状態で発見され、18住は地床炉を覆うようにあった焼土内に、肉眼ですぐに拾い出せる状態で見つかった。また、58住はガラス小玉の発掘によって、土を洗っている途次、偶然、捨てた土砂の中から炭化米を発見したことが、そもそも「弥生の米」に注意を向ける発端となったが、その他の埋甕炉の土器内の土は、発掘当初からすべて採集しておいたため、このように水洗いをして拾い出すことができた。しかし、例えば70住のように、火災住居ということから、期待を持って覆土の水洗いをしたのであるが、ただの一粒も検出できなかったばかりか、埋甕炉内の上からもついに一粒の米も発見できなかった場合もある。

これに対し10住は、特異なビットであったため（貯蔵穴かと想像して）、64住は焼土が多量に見られたので、あるいは火災に遭った住居ではないかと採集しておいたビット内の土から、ともに多量の炭化米を検出できた。これらは土器内の土に含まれていた場合もそうであるが、発掘中に肉眼では全く気付かなかったほどの微量であり、したがって炭化米が土器内、ビット内に入れられて遺棄されたと考えすることはできない。竪穴覆土内に何らかの原因で混在したということであろう。このような住居址では竪穴覆土を多量に水洗いしたら、相当量の炭化種子類が採集できる可能性があることを特に指摘しておきたい。状況に応じて土の水洗いは随時、行う必要のあることを痛感した。

また、炭化種子類と一所に、タール状のかたまりがわずかではあるが、37・43・58・59住の埋甕炉内から検出されている。煮こぼれのようなデンプン質のものが炭化したものと想像したが、この中にアワ状の粒が混じるなど、弥生時代の調理内容の一端を窺えるような資料ではないかと思われる。

なお、この表の作成は、炭化種子類の拾い出しの段階までを調査団で行い、個々の同定と粒数の算出は信州大学農学部氏原輝男助教授の指導を得たことを明記しておく。

第V章 調査のまとめ

第1節 石 器

1. 石 庖 丁

今回の調査において12点が発見され、そのうち10点までが住居址内からの出土である。それらを石質・形態・出土状況などについて若干の記述をしてみたい。

193・194 粘板岩製、全長は9.9cmで肩は円味を持ち紐穴は一孔で、やや一方に偏ってはいるが、両決りの手法で大きく穿たれている。背部は薄く、刃部稜付近で厚く蛤刃状となり、直線刃半月形の形態である。これについては出土が特異で、紐穴を中心にして二分されているが、片方は22号址の覆土から出土し、片方は62号址の黒土層から発見されたものが接合したものである。このことについては若干の問題があるので後述するが、刃部の状態からして、この二分された小片は各々が一個の利器として使用されたとし、刃の中心部付近が磨減して、太刃となり紐孔直下は鋭い。従って刃部縁で見ると、凹一凸一凹の波形を呈している。

195 粘板岩製、表面は剥離面のために刃部稜から背にかけて凹凸はあるが、刃部はいいいに研磨されている。裏面は平滑な自然面を利用している。石質がやや緑色を呈しているので美しく、全長8.6cm、幅2.9cmで、孔は背部に接して一孔が両決りで穿たれているが、これに紐通しなどをすればすぐにも欠けるような位置にあり、非実用的な感じさえする資料である。形態からは直線刃半月形で、出土地点は溝2の住居址外出土の一点である。

191 粘板岩製、58住の覆土から出土。肩部に円味をもった刃部直線半月形であるが、紐孔は中央部に縦に二孔が穿たれている。背に接した上の孔は上辺を欠かない程度に斜めに片決りされ、下の孔は、両決りであるが、上の孔を欠かないように斜めに大きく穿っている。並列二孔は本県においては中・北信地方で出土しているが、縦列の二孔は珍しく、通常の使用の外に何らかの利用があったのかなど考えたい特異な例である。

185・186 共に粘板岩製で24住の床面直上から出土したものであるが、両側ともに肩部に円味をもっており、186は長方形、185は台形を呈している。186は剥離面が表裏に残り、刃部が研磨されているのみの粗雑な作りで、紐孔の決りも大きい。185は一応全体に研磨されているが、刃部も雑な仕上げで、鋭さなど見られない。中央部は使用のために磨減して、やや内彎している。

190 21住より出土したもので、結晶片岩製、肩に円味をもち、穴は一孔で両決りで穿たれている。全体剥離のままの粗雑であり、刃部と背部の面どりのために研磨がほどこされている程度である。刃部中央には使用によって磨耗のあとが残されている。

183 結晶片岩製で34住から出土、製作全体から見れば粗雑で、片端は楕円状に剝離したままを使用している。片端は厚いままを磨りおとして面どりしており、形態は葉切庖丁の先端部を思わせるものである。従って刃部は薄い部分が鋭く、側面の面どりの部分は鈍い研磨である。

192 58住床面直上から出土した粘板岩製である。形態は木葉形といえるが、剥片に若干手を加えた程度で、刃部は片側のみ研磨し、紐孔も背部からやや下ったところに厚さ半分程度を穿ったままで止めている、未完成品と言えるものである。

187 48住から出土した結晶片岩製である。不整形で、研磨は刃部にほどこされているのみであり全体にはほとんどみられない。孔は背部近くにほんのわずか残すだけの未完成品である。

188・189 35住より出土した粘板岩製の破片。188は端部破片、189は中央部の残片でわずかに紐孔を残している。

196 住居址外より出土した砂岩製のもの。研磨は粗雑で、表裏面に剝離のあとが残されている。背と端部には一応面取がなされ、刃部にも研磨は行われているものの、刃縁は曲り、円刃状である。紐穴については、背に近い場所に心もち傷をつけた程度で終わっている。

以上、出土した12点についての概略を述べたが、形態で見るとは直線刃半月形、直線刃長方形、直線刃台形、その他の形に分類される。共通点としては長さが10cm以下で、掌中に入ってしまう程度の小形であり、紐孔は一孔を有する形ということである。近隣を見ると、上下伊那、諏訪、松本平にかけての地域であって、松本平では弥生時代中期末遺跡から発見されているが、伊那地域では弥生時代後期に多い。本遺跡の場合は時期、地域的に見て伊那地域の範囲に入るものと解釈する方が妥当であろう。しかし、ここで疑問とされることは、伊那地域においては磨製石庖丁と同時に併出される打製石庖丁が一点も出土していないことである。これは、今までにもいわれている用途の上でのちがいで、本遺跡での必要を認めなかったのか、また192・187・196などの資料からすれば、打製石斧類のなかにも側面を利用すれば充分に代用されるものもあるので、今後注意して観察せねばならないであろう。

次に先にも述べたように出土した13点のうち11点までが住居址内から出土しており、1点を除いては橋原Ⅰ～Ⅲ期の土器を出土する住居址からである。そのうちの1点とは、194の分割出土した片方の62住のものであるが、62住は橋原Ⅳ期（もう片方の22住はⅢ期）に比定されて時期的に下る。これは橋原Ⅲ期に入る16住が重複、切断されているところから、それらの遺物が混入されたものと解釈しておきたい。いずれにせよ石庖丁の併出は、橋原の弥生後期の各期にみられるということである。

さて、住居址内出土のうち、一住居址から2点出土した例が3例あり、2点ではあるが集中して見られることである。これと同例を近接遺跡で見ると岡谷市海戸遺跡においては3点出土し、他住居址は1点出土のみが1例あり、他は皆無である。天竜川を下った伊那地方の諸遺跡にも2～4点と出土する住居址も見られるが、それに反して出土皆無の住居址が多いことに注目せねばならない。また先の1個体が分割され、各々が別の住居で使用されていた事実は特に

注意されることである。16住と22住は直線距離にして約40mと離れ、地形的に見ても土砂の流入、混在するような位置にないことから、一つの農具に貸借関係があったことを物語るのか、それとも現在でも農村地域で見られる什器などの保管を輪番方式にしたり、頭屋まわしなどの方法があるが、それに類似したことが行われていたことも考えられる。ムラ共有の備品、小集団での共有道具などは、「共同体」組織には必要で、水田・畑などの管理・生産の増強、そしてムラの維持に利用されるなどと想像を豊かにするが、針を棒にとりなす恐れもあるので控えた。いずれにしても今後の研究課題の一つになるとと思われる。

2. 砥石

橋原遺跡で調査した58棟の住居址のなかで、砥石の発見された住居址は24棟の多きのにほる。そのうち25住の平安時代を除いて、あとの23棟はすべて弥生時代の住居址である。なかでも、24住の6点と43住の4点がずばぬけて多く、他の住居址では1～2点が一般的な出土状態であった。また、時期決定の不可能であった数基を除き、弥生時代の51棟のうち約半数に何れかの型式に属する砥石があったことになり、その普遍的な保有個数の大きさに驚かされた。そこで、この時代の砥石の在り方について若干の考察を加えて参考に供したいと思う。

砥石の意義 一般的に云って、考古学で扱う範囲の出土遺物のなかで砥石の占める位置は極めて低いものでしかなかった。特に、縄文時代や弥生時代において、かなり高度な考察を加えた論考に接したことがない。そこで、まず、砥石の意義について記すことから始めてみることにしよう。

砥石は、漢読みでシセキと云い、砥は、きめの細かい石の義で合砥、即ち、現在の中砥程度の砥石をさすことになる。これに対し、荒砥に相当するものに礧石・レイセキがある。礧石は、和読みではトイシであり、きめの粗なる部類の砥石をさしている。しかし現在は、砥石・礧石の区分が用いられることはほとんどなくなっている。また、この二者を合併したのに礧砥・レイシがある。これは誠に当を得た呼名で、やはりトイシであるがほとんど使用されない。現在は専ら砥石だけが残り質を表現する場合は荒・中・仕上げなどの区分が一般的である。

用法について 用法についてもさまざまであるが、主なものをあげると、磨・研・礧磨・磨研・磨刮・磨洗・磨利などがあり、同義に研磨がある。磨は、本来、ヒキウスからスリミガクに転化した用法である。研は、スリミガクであり、礧磨・レイロウと、磨研は、ミガキトグの意である。磨刮・マカツは、ミガキスルの意で、中央が凹んだり振れたりした砥石を平に戻す時に用いる。磨洗は、ミガキ洗うの意で、磨きながら錆などを取る場合に使い、磨利は、ミガキ鋭利にする場合に本来区別して使用したようである。

形態と石質 砥石の形態上の区分はあまり歴然としていない。強いて分類するならば、A、据置型—長方形で平坦な面に据置いたり木製の台に据置く。B、把握型—長方形棒状で片手で握れる程度のもの。C、当擦型—片手で軽く持てる程度のもの。形はいろいろあっても差支えない。D、薄型—極めて薄く漆で和紙を貼付けたもの。E、回転型—グラインダーなど機械力

を利用して回転させ能率を上げ得るもの。F、粉末型—やはり機械力を利用したり、指頭などに付着させて細かい部分に使うもの。以上、6分割することが可能であり、それぞれに長短の特長があるので場面により使いわけなければならない。

砥石の必須条件は何といっても均一な石質を持合せていることである。このことは、対象が金属であっても石であっても同じであり、たった一個の小さな不純物があった為に一行程くらい逆戻りしなければならなくなってしまう。次に大切なことは、ひびや割目が無いことである。ひびや割目は不純物があるのと同じで引玷・ヒケをつくる主因になるし、金属器を研ぐ場合など砥石が割れて思わぬ怪我のもとにもなりかねない。第三は、容易に獲得出来て加工整形が簡単な石質であることが要求される。

これら、形態上および石質の面での要求を満たす原料は堆積岩において他にない。堆積岩類で砥石の原料にならないのは、洪積世末から沖積世にかけての新しい岩石と、礫岩などの粗大なものだけである。利用されている岩石名をあげると、荒砥には、砂岩・和泉砂岩・硬砂岩が多く用いられる。中砥には、細粒の砂岩・凝灰岩・沸石岩・硅質頁岩・層灰岩・泥岩などが利用されている。仕上げ砥には、粘板岩類・泥板岩・板状石灰岩・輝緑凝灰岩・アジノール板岩などが利用される。

しかし、どの地域でも、これらの良質の原料が容易に入手できるとは限らない。ある種の物は入手できても入手困難な場合の方が多いのが実情である。この度合は、時代が過ぎればのぼるほど特殊な原料の入手が困難になるのが常である。こうした場合には、いきおい粗悪な原料で我慢することになる。例えば、荒砥には、安山岩類・輝緑岩などが使用される。特に、当地では、輝石安山岩と角閃石安山岩が多い。中砥では、砥川流域に産出する玻璃質輝石安山岩がみられた。また一風変わったものに変輝岩と雲母片岩などの変成岩類があった。

このように砥石の原料調達にはかなりの苦心が払われたようである。それに、現在では、すでに良質の原料が少なくなったこともあって合成砥石の研究と製作が盛んになり天然産の砥石を駆逐しつつある。

橋原出土の典型例 当初に述べたように橋原遺跡の調査では、多数の砥石が発見された。そのなかで、数も多く組み合わせの最も典型的なのが24号住居址発見例である。24住からは計6個が発見され、その組み合わせは、荒砥2個・中砥2個・仕上げ砥2個の割合であった。形態的には、据置型1個・据置型→磨減→当擦型2個・当擦型1個・据置型→破損→当擦型2個となる。石質は、硬砂岩2個、砂岩3個、粘板岩1個というようになる。

したがって、本址発見の砥石を詳細に観察すれば事足りるといっても過言でないほどである。まず荒砥では、203と204がありいずれも硬砂岩製である。203は、据置型の砥石の破損品であり、部厚い道具を研いだものと考えられる。鉄器というよりむしろ磨製石斧類だろう。204は、明らかに鉄器用の荒砥で据置型から当擦型に変化した状態が明瞭に残されている。この砥石に付着している酸化鉄は、鉄器の腐蝕した残滓かもしれない。202と205は中砥である。202は、典型的な砂岩製の当擦型砥石である。研磨面は凸状を呈し砥糞とぎの痕跡が残る石器用の砥石

である。205は、堆積面に平行する二面を利用した鉄器用の砥石で、両面ともに削止め痕が残る。この砥石の場合は良質であった為か、堆積面に直交する面も利用し、最後に薄くなってから当擦型に転化させた為に削止め痕が著しい。酸化鉄の付着は204と同様である。200と201は仕上砥の部類に属する。200は、黄味を帯び泥岩に近い砂岩製で201と同じく当初はかなり大形の据置型仕上砥であったろう。201は、黒色で良質の粘板岩製である。割れる以前は木製の据台があった鉄器用の最上級の仕上砥であったろう。

質区分の代表例 前項で24住の典型例について観察の結果を述べたので、こんどは、形質別の代表例をあげてみることにしたい。荒砥では、36住発見の板状据置型砥石がすばらしい。石質は硬砂岩であり、削止め痕が連続して残り、かなり大形の鉄器を研いだことが判る。223は、7住発見の据置型で鈎手研の典型例である。215は、35住発見の据置型砥石の破損品である。233は、67住発見の据置砥で破損しているが鈎手研の好例である。240は、61住発見で据置型の破損品である。この荒砥は、破損後、砥糞とぎの中砥に転向させた好例である。225は21住発見の据置型砥石の破損品である。削止め痕があるので鉄器砥石であり破損後は当擦型に転向させている。217は据置型の破損品であるが、凹石状の敲打痕は何の為に施したのか不明であるが、ことによるとクルミ割り具にしたのかもかもしれない。

荒砥のなかで変っているのが安山岩製の砥石である。241は、据置型の石器砥石である。230は、70住発見の据置型で、やはり石器砥石であったろう。234は、大粒の輝石を含む安山岩製の据置型砥石の破損品である。やはり、これも石器砥石であろう。

中砥では、216の玻璃質複輝石安山岩製のものが面白い。この石は砥石としては良質とは云えないが、砥川流域に多く産出する岩石を利用している点に重きをおきたい。208は、据置型であったが破損後は当擦型に変わったもので鈎手研痕が残る鉄器用砥石で酸化鉄が付着している。236は、典型的な把握型砥石で堆積面から剥離している。58住発見の227は、破損品ではあるが典型的な当擦型砥石で鈎手研痕が二面に残り、また、刃止め研痕も認められる変輝岩製の変り物である。

仕上砥で典型的なのは、34住発見の粘板岩製砥石209である。この砥石は、典型的な据置型であったのが破損後に当擦型に変わった好例である。224は、20住発見で当擦型の典型的な鎌砥石である。これ程薄くまで使うには当木を使ったものと考えられる。

仕上砥の範疇に入れて良否の間われるのに199と229・239などがある。これらは、いずれも砂岩-粘板岩の互層をなす岩石の河原転石を利用したものである。そのうち、229と239は金属器の仕上げに使用した様にもみられるが、199については一寸とまどいを感じさせる代物である。これらは、場合によっては、石器か木器の研磨用だったのかもかもしれない。

以上、5項目にわたり砥石の意義から個々の特長についての観察結果を摘出してみた。

砥石の意義については、時間があれば、もうすこし深く研究すべきであったし、また、石質による名称なども詳細に調査するのを感じた。例えば、名倉砥・備水砥・カミソリ砥などが加われば良かったと思う。それから、今回、名称だけにとどめた回転型・粉末型などについて

も追求しなければならないと思われた。

個々の石器についての観察結果からは、石材の調達範囲が諏訪地方の北部から上伊那北部にかけてと比較的に狭いことが判明した。

また、これも時間のせいかも知れないが、どんな形態の石器や金属器を研磨するのに使用したのかまで追求できれば良かったが、そこまで及ばなかったので、それや、これやを総合して別の機会に完成させたいと考えている。

3. 砧石

橋原遺跡の調査で発見された石塊状の石器のなかで、砥石の次に目についた未見解の石器に砧石がある。

砧石は、13基の住居址と土壇などから発見されたが、そのうち、最も多かったのが24号住居址の3個であり、その他の住居址からは1～2個と、砥石の発見数値と同じ方向性を示していた。また出土状態も、その多くが床面またはその近くに固定されるが如き状態で据置かれていた。このような出土状態から調査の段階では石皿の扱いを受け、その後、整理の段階では稲の脱穀の一行程を示す椀印台、作業用台石などの考え方があったようである。

そこでこれらの意見の統合を計るべく詳細な観察を行った結果、次項に示すような結論を得たので記して参考に供したい。

石皿としての機能の検討

これらの石器の多くは輝石安山岩の石塊で大きさ・形状・厚さなどに画一性がなく、使用面は大小に関りなく石塊の中心に集中し、まれに玻璃光沢を有することである。

石皿であれば、その大多数が安山岩の河原転石を利用するのに、その痕跡もなく石塊を利用し多少の加工を加えた程度でしかない。

第三点は、石皿であれば必ず目立痕があるはずなのに目立痕が全然認められない。

第四点は、飛散防止の構造を具備していないし小形のものが多すぎる。

これらの諸点を総合し石皿（石臼）でないことは言をまたずに明解となろう。

では、脱穀用椀印台としてはどうだろうか、まず稲の脱穀から考えてみよう。原生種および初期の稲はかなり脱粒性が強く稈も弱かったと考えられる。この場合の脱穀は極めて容易である反面、ぼろぼろとこぼれ、拾い集めることの方が容易でなかったろう。もちろん、稈も弱く根刈など無理というものである。ところが、弥生時代の稲は相当に改良され脱粒性はかなり改善されていたはずである。そうした場合の脱穀は、手扱か、二本の棒の間を通す扱箸ごきか最も適した方法であろう。この二通りの脱穀方法は穂刈りでも可能であり飛散する心配は全くなく、穂切れをおこして穂くずの処理をする必要もない。穂くずの仕末をするようになったのは千歯扱きが開発された江戸時代以後のことである。

穂を叩きつけて脱穀する場合は、ゴザか蓆やネコを敷いた上に木組みの印台を据えて、それに叩きつける方法しかないので、当然の結果として根刈りが要求され、屋内でできる作業では

ない。30号土壇から出土した台状の礫を除いては、屋内の出土であり、直径50cm以下のそれも土間に据えた石に、叩きつけたりする脱穀はまず考えられない。

藁細工と藁叩きの効用

それでは、これら輝石安山岩製で玻璃光沢のある石は、はたして何に使ったのだろうか。前二項の結果をみるまでもなく即座に藁叩き台であると答えたい。

弥生時代に栽培されていた稲の藁は、適当な水分を与えて静かに順次力を加えて叩くことにより、その繊維は柔かくなり強度を増してくるほどまでに改良されていただろう。藁の多面的利用である藁細工の普及が考えられなければならない。藁製品が有ると無いとでは稲作民の生活に多大な差異が生ずる。

藁叩きは、いろいろ実験してみても石の上で木槌で叩くのが最も成績が良い。石は、叩かれる藁の量にもよるが、そう大きくなくて厚さは10cm以上ある方が石がぐらつかなくて良い。叩く場合は、なるべく石の真中を使うようにするのが賢明で、端で叩くと繊維が切れる事が多い。そして、ある程度の使用期間を経過すると使用面に藁叩き台特有の玻璃光沢が生じてくる。

つい最近まで、ほとんどの農家の土間にはこの藁叩き台が据えられていたものである。そして、収穫作業が終った冬期間に藁細工が行われていた。山浦方面では屋外に堅穴を掘り小屋掛けした「穴倉」が藁細工などに専用されていた。橋原遺跡にもそれに近い遺構があったのである。即ち、30号土壇である。この小形の堅穴には砥石と藁叩き台が据置かれ、まさに穴倉の初源版であった。

藁叩き台とその名称

橋原遺跡出土の白石を見てからというもの近所の老人をつかまえては名称をたずねて歩いた。しかし、誰一人としての確かな名称を教えてくれる人がいなかった。橋原遺跡に近い、川岸三沢では「アテイシ」と称していることを知ったが広く一般的とは言い難い。そこで、日本民俗学事典に依って適当な、名称を選択した。

砧とは本来、織たての衣を叩いて柔かくする台のことであるから、石を付けて砧石とすれば「キヌタイシ」となると的確な名称となる。打つ方は、砧杵、即ち、キヌタギネであるが、我国の場合には、槌が一般的であるから砧槌であろう。ところで、その対象が一般的な繊維でなくて藁なら名称を変えるべきだろうか。しかし、藁であっても、稲の稈を叩くことにより、繊維を柔かく強くするのであるから基本的に同じことであり、名称まで変える必要はないだろう。また24住例の一部や、その他にも別の繊維を打ったと思われるものもあるので、この際は単に「砧石」としておくのが賢明と云えるだろう。

これまで3項目にわたり、あまり聞きなれない石器「砧石」について関連する様々な事象をとらえて考察を加えてみた。しかし、時間が無いのと浅学のため思うにまかせない点が多々あった。これらについても砥石と同じく後日の研究に委ねたい。

第2節 土 製 品

1. 紡錘車と土器片円板

紡錘車の分類については、手捏ねて成形したものと、土器片を利用したものとを二大分類したが、土器片を利用してあらかじめ紡錘車としての機能を果たす例もあるが、どうかと考えられるもの、さらに破損品で紡錘車になるかどうかの例品もある。したがって、無孔円板をも含めて集成、分類、検討してみたい。

第17表 紡錘車と土器片円板の分類

I 手捏製	1 扁 平	A 無 文 (379・394・404・412)
		B 刻線文 (408・411)
		C 刺突文 (410)
	2 凸 レンズ	D 刻線文 (409)
		E 無 文 (383・384・386・387・392・395・398・400・413)
	3 山形レンズ	F 無 文 (382・396・405)
II 土器片	4 打欠き成形	G 有 孔 (393・401・402・403・406・414)
		H 無 孔 (417)
	5 摺磨き成形	I 有 孔 (385・388・389・390・391・399・407)
		J 無 孔 (381・415・416・418・419・420・421・422・423)

手捏ねて作った I 類 1、2、3 はいずれも中心部の孔を観察すると、10mm 以上の深さをもっており、孔の貫通法は焼成前に棒状工具で垂直にあげている。もしかすると棒を中心に刺したまま焼成しているかともみえる。この貫通孔の方法は、紡錘車の機能上重要なことである。つまり紡錘車に心棒を通し回転して糸をつむぐ際、糸車と心棒がゆるまないように保持されなければならない。のちに出現する鉄製紡錘車をみれば、糸車と心棒は一体に作りあげられており、その辺がうかがえよう。したがって、土製にしろ石製にしろ糸車は、心棒とのずれとゆるみができない点が重要である。

I 類の糸車はいずれも中心孔は、心棒との接触部が10mm 以上あって、孔の内側が垂直であるため、もっとも大きい摩擦面が得られ、心棒との保持力を強くし、ずれうごくことが少ないとみてよい。そのような観点にたってみると、II 群 4、5 類はいずれも土器片利用であって、問題が生ずるのである。ただし、II 群 5 類 I、388 例については、厚手土器片を用いており、孔も垂直に穿孔されていて、その部分の厚さも13mm ある。土器片利用の糸車としては唯一例であ

る。

そのほかの土器片利用のⅡ群中で、有孔の4類G、5類Iについて観察すると、外周を打欠き、あるいは摺り磨きで、円形または隅丸方形に作っている。心棒の孔は両側から穿孔されており、いずれの側からもスリ鉢状にあげられ、厚さの中心部で合致している。したがって心棒を入れた場合、棒と糸車の接触部分は、I群のように接触部分が大きくなく、点状に接触していることになる。つまり糸車と心棒はずれうごき易いといえよう。

つぎに糸車の重量をみてみよう。I群は最小重量12g、最大重量49g、平均の重量は31gである。一方Ⅱ群については、最小4g、最大重量21g、平均9.9gとなる。紡錘車の機能の一つに、糸を摺るといふこと、つまり回転をさせるという機能面が必要である。これには、ある一定の重さが必要であるが、その重さによって回転をスムーズにさせるのである。紡錘車の糸車は、つまりハズミ車の役割を果たすのである。

糸車のハズミ車としての役割に適す重量は、この橋原遺跡においては、30gくらいがもっとも適していたとみてよいだろう。となると、土器片利用のⅡ群で、有孔G類とI類は10g以下という重さで、かけはなれた重量であることが指摘できよう。

以上、機能面からの観察で指摘した二点、つまり糸車と心棒の接触面の保持力の問題と、紡錘車本体を回転させる、糸車の重量の最適値の問題は、橋原遺跡における弥生時代女性の糸つむぎにおける、生産性の高低を左右する問題である。

つまり糸車が心棒としばしばゆるんでは困るし、また糸の摺りを加えるのに、女性の手先の操作にもっとも最適な重さの糸車であらねばならないはずである。それらの観点からして、土器片利用の紡錘車用糸車は、1例を除いて、不適といえよう。ましてⅡ群4類H、および5類Jについては、片面から穿孔をしかけた1例を加えて、紡錘車以外の遺物と考えた方がよいと思われる。

施文についてみると、I群には4例ある。3例は中心孔から外周に向けて、放射線状に刻線文を施す。そのうち408例は、綾杉状に刻線を描き、一見、羽状文にみせている。410例はよくみると、表裏面に細かい刺突痕が、無規則に認められ、また糸か布痕ともみえる痕跡が認められるが、明確にはわからない。

土器片利用の円板には、本体の櫛櫛文が残っているのは、当然であろう。

出土住居址についてみると、8号住居址に2個体、36号址に3個体分、62号住居址で5個体分が発見されている。手捏製紡錘車20個中、10個体が3軒の住居址に出土していることになる。また今回調査された橋原遺跡弥生期住居址総数58棟中、13棟の住居址から発見された。これらのことは紡錘車をもつ家、つまり糸つむぎをする家が、集落のなかでどのようなあり方かを知る手がかりになる問題を含むかもしれない。その上になつて、紡錘車に印刻されている、放射線状の文様をもつ糸車の意味も解明されるといえよう。

2. 小形手捏土器

弥生時代遺跡から出土する土器のうち、日常生活に使用されたものとは考えられない小形の土器がある。この小形土器を古くは袖珍土器と呼んでいたが、その大きさに10cm前後の土器と、5cm以下の小形土器がある。この小形土器は手捏^{てつね}という、指頭をたくみに使って成形した超小形土器のことで、その呼び方も、袖珍土器から、小型手捏模型土器、小形粗製手捏土器、ミニチュア土器、超小形土器などがある。そして早くから日本書紀神武天皇の条に出ている、「天手挾^{あまのてくわし}」とみられている。ここでは小形手捏土器と呼ぶ。

橋原遺跡の調査では、小形手捏土器の発見は20例あり、出土地点は1例を除いて14棟の住居址内である。観察の結果を表に分類して、その結果について考察をしてみよう。

器形 従来からいわれているように、母形の土器とすべてがよく類似している。もっとも多い器形は鉢形で8個あり、成形法は手捏が5例、輪積が3例である。高坏は6個体で424は高坏の一部であろう。高坏の成形法は手捏3例、輪積法1例、不明1例である。

434 手捏ねで壺形に成形し、頸部には二本の横走る沈線が施され、胴部は硬くヘラナデされている。内部は4mm位の1本の孔が貫通し、口辺内側は上部からすり鉢状に凹めている。壺中央の貫通孔は焼成をよくするというよりも、壺内部の中空の表現とともに、底部穿孔土器という意味が強いと考えたい。

443 壺形土器の破片とみられ、輪積みとヘラミガキ、ナデ整形がみえる。

433 甕形のほぼ完形品で粘土板を巻き上げ、右まわりに重ね合せ、体部3枚、口辺部二枚のはり重ねである。丸底につくり、外底部に粘土板を接合させて平底に成形している。外側は左下がりのヘラミガキ整形。内部は横ナデをしている。なお口辺部に穿孔がみられるが、焼成前に外側から内部に押しこんだ穴である。この一孔のほかは不明であるが、相対位置にも一孔あるかどうか、破損していて明らかでない。

441 器形は台付甕といえようか。下底部から脚部は手捏ねでつくり出し、胴部を3段の輪積みで成形してある。外面には口頸部にナデを、胴部は横と斜行する細いヘラミガキ成形を施し台脚部と胴部の接合点には指圧痕が残っている。内側にはナデ痕がある。口唇部はやや反し底裏面にはヘラミガキがされている。小型の精製粘土を用い硬い焼成の土器である。

435 坏形に手捏ね成形し、内外にナデ整形がみられる。脚部接合部には指圧痕が残っている。

425 鉢形であり手捏ねで成形している。口唇部に連続刻目をつけ、整形は一部に指圧痕がみられるが、外側は縦方向の細い幅のヘラミガキ、内側は横方向に細い幅のヘラミガキを施している。底部も同様のヘラミガキが行われている。

426 鉢形で上部破損。成形は底に粘土板をつけ、4段の輪積み法である。底と輪積みの接合部は指頭で押圧整形し、外面には縦ヘラミガキ、内側は横から斜行する雑なヘラナデをしている。

427 鉢形になるとみられるが、底部を欠損している。成形は手捏ねで指圧痕が残り、その上に細い幅のヘラによる整形が、縦・横・斜に施されている。内面はナデ整形である。

429 鉢形としたが、脚部を高く作っている。成形は手捏ねで、内外とも指圧痕が付き、内側はナデた痕がある。底部はヘラによる一回のミガキがある。

431 鉢形になるが、底部欠損している。成形法は現存する部分で4段の輪積みのみえ、外面は雑な縦のヘラミガキ整形をし、内面は縦横のナデ痕がみえる。

438 超小形の鉢形をし、成形も手捏ねで指痕がよくみられる。内外面ともナデ整形が施されており、底部は欠損している。

442 鉢あるいは杯の形をした手捏ね超小形土器で、胴部には指痕がみられ、内側はくじり取ったような凹部に成形されている。器内外ともナデ整形が施された土器である。

430 高杯形で手捏ね成形であり、外側はナデで、内側はハケナデもみえる。杯と胴部の接合部に指圧痕がよく残っている。器台としてもよいかと思う。

432 脚部欠損の高杯であろう。手捏ね成形で作り出し、脚と杯部接合部に指圧痕がみられ、その上にナデの整形を施している。

436 高杯形で手捏ね成形後に、ヘラミガキを内外に施している。脚接合部には指圧痕がみられる。

437 高杯脚部であるが、小部分である。成形は指圧痕がわずかみられるが、内外面ともナデ整形をしている。

439 高杯形であるが、破損が著しい。成形技法については、杯部の剝離した部分に貼りつけの痕跡があることから、輪積みとみてよいだろう。整形は杯部・脚部とも外側はナデで、杯内面と脚内側にはハケ整形を施している。脚部に4mm位の粘土円板がついている。

440 鉢形にもみられる器形であるが、輪積みであり、口辺直下に5mm位の孔が焼成前にあけられている。整形は口辺部ナデで、下半には細いヘラミガキ整形がされている。内面はナデている。高杯の脚とみられるが、脚部の成形方法に輪積み例は少ないので、鉢であることも考えられる。

424 高杯あるいは鉢形の破片で、器外部に縦ヘラミガキ。内面にナデ整形痕が認められる。

428 塊または鉢形になるとみられる底部分で、小指の入る内径に手捏ねでつくり、それより上部分は輪積みの痕跡がある。外側には輪積みの接合部分を押し、指圧痕がみえるが、内外ともナデ整形である。

製作法について 器形は鉢、高杯、壺が多いが、甕、杯と弥生時代の土器器形と同種である。特殊器形として台付甕があるが、弥生土器器形のミニチュアであることがうかがえる。製作法は基本的には手捏ね成形であって、器体部分の製作には、粘土帯を用いて、3ないし4枚を輪積みし、接着させている。成形後、その上に細い竹べら、ハケなどをつかって、ヘラミガキ、ハケナデあるいはナデによる器面整形をしている。胎土についても、粘土に砂粒を混ぜていて母形土器の胎土と同じであり、同一粘土を用いたとみられるなど、いずれの点をとっていても弥生土器の製作法と共通している。しかもこの小形手捏ね土器の製作法が、想像以上に、母形

第18表 小形手捏土器の分類

1 小形手捏土器の器形

器形	鉢	(425, 426, 427, 429, 431, 438, 442)
	高 环	(430, 432, 436, 437, 439, 440)
	壺	(434, 443)
	甕	(433)
	环	(435)
	台付甕	(441)
	破 片	(424, 428)

2 成形方法

成形	手捏ね	(425, 427, 429, 430, 432, 434, 435, 436, 438, 442)
	一部手捏	(428, 441)
	輪積み	(426, 428, 431, 433, 439, 440, 441, 443)
	不 明 (破片)	(424, 437)

3 整形方法

		(外 面)	(内 面)	
整形	指 压 痕	(426, 427, 428, 429, 430, 432, 435, 436, 437, 438, 441)	(434, 435)	
	ヘラミガキ	縦	(425, 426, 431, 436, 440, 443)	(436)
		横	(427, 436, 441, 443)	(425, 426)
	ヘラナア	(434)		
	ナ ア	(424, 428, 430, 432, 435, 437, 438, 439, 442)	(424, 427, 428, 429, 431, 432, 433, 434, 435, 437, 438, 440, 441, 442, 443)	
	ハケナア		(430, 439)	

() 内は遺物Noを示す

土器と同様に手を加えていることがわかり、精細であった。

出土地点と器形 出土地点を遺構別にみると、圧倒的に14軒と住居址内であった。8号住居址例をみると、器形は甕、高环、环、壺で、7号住居址例では、鉢、高环、壺であるところから、8号住居址例の器形セットが、標準なのかも知れない。

橋原遺跡の弥生住居址数58棟のうち、小形手捏土器を伴った住居址は14棟で、比率は25%。⁽¹⁾ そのことが、時期別にあるいは社会構成上にどう係りあるか、まだ未検討であるが、先学の説を参考にすると、(1)住居地域における意味 (2)農業祭祀との関係 (3)埋葬遺跡との関係があげられている。また古墳文化への移行期において、家々の「まつり」の供献具であった小形手捏土器が、一方では石製甕となって古墳内への供献具になり、一方は家の祭りの道具は家から姿

を消して、神社、神名備形の山とか巨岩への奉祭品として、仮器の姿に変わったとする考察もあ
る。⁽²⁾

橋原遺跡の立地は諏訪湖から流れ出す天竜川口に位置し、水辺観もうけとられる。また米の
大量発見が示すように、水稲農耕の隆盛期にあることもうかがえる。しかも立地は天竜川東岸
であって、赤石山脈最北端に位置し、背後の山地は西山山地と呼ばれ、守屋山および諏訪神社
上社につづき、峠路をわずかで上伊那辰野の、天竜川畔の弥生期大遺跡に通じている。これら
が今後、橋原遺跡発見の小形手捏土器を考える上の問題点になろう。

小形手捏土器の発見は、県内例は聞いていない。近県例からして八王子鞍骨山遺跡⁽³⁾、登呂遺
跡など、関東、東海あたりまでの発見例であって、橋原遺跡例は重要な発見例になるであろう。

参考文献

- (1) 森貞次郎「新天手抉考」
- (2) 藤森栄一「天手抉の発展経過について」古代文化12-11
- (3) 岡田、服部「鞍骨山遺跡」東京都八王子谷野遺跡調査団

第3節 弥生土器

今回の調査で発見された58棟の弥生住居址は、一部に切り合いがみられるなどから、同時存
在したということは当然考えられないものである。幸い当地方は最も豊富な資料を得ることが
でき、おおまかな時間差が認められるので、その概略についてふれてみたい。

1. 弥生土器の器種分類

壺・甕・鉢・甑・高坏・器台・坏・台付甕がある。施文具は全て備であるので、特別にこと
わりのない場合は「簡描」を省略して単に波状文・簾状文…と記した。

(1) 壺

壺は甕に比較してその数量は多くないが、全期を通じてみられる。壺の基本的整形は、口縁
部をヨコナア、頸部から体部上半をハケ整形し、体部中・下半はヘラミガき施される。文様帯
は頸部にあり、場合によっては口縁部にあるものもみられる。

壺は口縁部の形状に着眼して、A～Cに分類した。

A 口縁部が屈曲し、有段口縁を持つものである。文様帯は有段部・頸部にあるが、無文の
ものもみられる。

B 口縁がラッパ状に開くものである。口縁部が丸くなるものと、三角状に張り出すものと
がある。文様帯は口唇部、頸部にあるが、無文のものもみられる。

C 口縁が立ち上り、大きく内湾し、体部が強く張り出すものである。

(2) 甕

甕は全器種中最も数量が多い。文様帯は頸部から体部上半にある。甕の基本的整形は、口縁部にヨコナデ、頸部から体部上半にハケ整形、体部中、下半にヘラミガキが施される。無文土器は、口縁部から底部までヘラミガキを施すものが多いが、ハケ整形のみのものも若干みられる。

甕は口縁部・頸部・体部の形状、最大径の位置に着眼してA～Gに分類した。さらに、器高・頸部の位置によってa～cに細分を行った。

Aa 口縁部はゆるやかに外反し、体部が張り出し、頸部は丸くくびれる。最大径が体部にあるか、ほぼ等しく、器高は比較的短い。全体にずんぐりとした器形である。

Ab 基本的にはAaと同じであるが、器高が長く、全体にほっそりとしたスマートな器形である。最大径は体部上半にある。

Ac 口縁部が強く外反し、体部も張り出すため、頸部は丸く大きくくびれる。頸部はより口縁に近く、最大径は口縁部にあるか、ほぼ等しいもの。

B 口縁部は直線的に開くため、頸部はくの字状にくびれ、体部が張り出す。最大径は口縁部にあるか、ほぼ等しいもの。

C 最大径が口縁部にあり、口縁部は強く外反するが、体部の張りが小さいもの。

D 最大径は口縁部にあり、器形はB、Cに似るが口縁端部がやや内傾するもの。

Ea 最大径が口縁部にあり、口縁部は大きく開き、体部の張り出しはほとんどなく、鉢に近い器形である。

Eb 最大径は口縁部にあるが、Eaほど開かず頸部径と体部径はほぼ同じである。器高の長いものと短いものがある。

F 最大径は口縁部にあり、体部が強く張るため肩の張った器形となる。

G 口縁部が折立し、有段となるもの。

(3) 鉢

鉢の数量は少ない。文様帯はなく鉢A・Bには朱を施したものがみられる。口縁部の形態によって、A～Dに分類した。

A 口縁部がくの字状に外反するもの。

B 口縁端部が内側に内湾するもの。

C 底部から口縁部に直線的に開くもの。

D 底部から口縁部にゆるいカーブをもつもの。

(4) 甗

甗はわずか6点の出土があるのみであり、しかも、完形品は1点で他は全て底部片のみである。文様帯をもたず、孔は単孔であるが2孔を穿つものが1例みられる。

(5) 高坏

高坏の数量はあまり多くない。文様帯はなく、朱を施したものがみられる。坏部の器形によ

りA～Dに分類した。

- A 環部が直線的に開くもの。
- B 環部がゆるやかに弧を描き、口縁端部がくの字状に強く外反するもの。
- C 環部が屈曲し段状を呈し、さらに、口縁部が強く外反するもの。
- D 環部がゆるやかに弧を描くもの。

(6) 器 台

わずかに3点みられるのみである。大型と小型のものがある。大型のものは高杯の脚部を再使用したものであり、外面には朱の塗彩が行われている。

(7) 環

1点の出土である。内面および外面底部近くはヘラケズリが行われ、外面の口縁部付近には横・斜め方向のヘラミガキが施される。胎土は精選されており焼成は良好である。

(8) 台 付 甕

5点の出土のうち器形の復元できるものは3点のみである。口縁部が短く強く外反するものと、大きく外反するものがある。前者は胎土・焼成とも良好であるのに対して、後者は砂粒を多く含み、焼成もあまりよくない。

2. 弥生土器の時間差

時間差は、壺・甕の形態、文様構成によってI～IV期に分けられるので各期ごとの概略についてふれてみたい。

I 期

文様は波状文をベースとして簾状文・短線文・円弧文・T字文・口唇部の刻み目文が用いられ、複数の文様を組み合わせるものが多い。波状文は全て右回りである。断絶が1回で回転台を使用した畿内型と、途中断絶が何回かある回転台を用いない中部高地型が見られる。両者の用いられる比率はほぼ同じである。

壺A(281・312・319・320) 大型壺と小型壺がある。文様帯は口縁部と頸部にあり、口縁部には波状文・円弧文が施され、頸部には波状文・簾状文が施される。体部は丸く強く張り出し体部下半は直線的に底部へ向う。最大径は体部中央にある。

壺B(280・282・313・314・316・409) 大型壺と小型壺がある。文様帯は口唇部と頸部にある。口縁端部が三角形に張り出すものは、口唇部に波状文が施される。最大径が体部中央にあり体部が球形状に大きく張り出すもの(282)、最大径が体部上半にあり、体部が張り出すため肩の張った器形となるもの(313)、体部が強く張り出し体部下半が直線的に底部へ向うため、ソロバン玉状を呈するもの(314・409)、体部の張りが弱いもの(316)、口縁部が短く外反するため、おちよほ口状になるもの(280)などがある。

甕Aa(289・323・325・419) 超大型・大型・中型甕がある。口縁部と体部が強く張るため、頸部のくびれが深い。最大径は体部にあるか、ほぼ等しい。

甕Ab (285・331・396・398) 最大径が口縁部にあるか、ほぼ等しいもの。体部最大径は上半にあり、体部下半は直線的に底部へ向う。

甕Ac (13・373) I期にのみみられる。体部下半が直線的に底部へ向う器高の長いもの(373)と、丸味を帯びる器高の短いもの(13)がある。文様は波状文のみが施され、帯数も2～3帯と少ない。

甕B (137・273・414・416) 口縁部と体部が強く張り出すため頸部のくびれが深く、くの字状を呈す。頸部が鋭く屈曲するもの(273・416)と、やや丸味を帯びたもの(137・414)がある。体部下半が直線的に底部へ向うものと、丸味を帯びるものがある。前者は大型甕に、後者は中・小型甕にみられる。

甕C (15・113) 大・中型甕にみられ、口縁部の外反に比して体部の張り出しが弱く器高の長い器形となる。

甕Ea (70・74・82・108) 大・中型甕にみられ、頸部がくの字状に屈曲し口縁部が折返状になるもの(74)と、全体にゆるやかな弧を描くもの(70・82・108)とがある。器高は短く、鉢に近い器形となる。

甕Eb (16・29・415) 甕Eaほど口縁部は開かないが、器高の短いずんぐりとしたもの(29)とやや器高の長いもの(415)とがある。

甕F (333・334・335・389) 小型甕のみ見られ、口縁部が短く外反するもの(335・389)と、大きく外反するもの(333・334)とがある。

鉢A (337・424) 口縁部が強く屈曲するもの(424)と、弱く屈曲するもの(337)とがあり、前者には内外面とも朱が施される。

鉢B (134・378) 大型鉢(378)と小型鉢(134)がある。大型鉢は口縁部を除いて、内外とも密なヘラミガキが行われる。小型鉢には内外とも朱が施される。

鉢C (39・117) 口縁部が大きく開くもの(39)と、小さく開くもの(117)があり、両者とも小型鉢である。

鉢D (297・388) 大型鉢(388)と小型鉢(297)がある。大型鉢は口縁部が鋭角となる。

高坏A 口縁部が大きく開くものとあまり開かないものがあり、両者とも内外面に朱の塗彩がみられる。前者は口縁部がやや外反する。

II 期

基本的にはI期と大きな差はみられないが、短線文・円弧文が消え簾状文が減少し文様の省略化がみられる。波状文は回転台を使用する巖内型と回転台を用いない中部高地型との比が、I期では同率であったのが、II期では9：4と巖内型が減少する傾向がみられる。

壺A (77・140・269・120) 大型壺(140)と小型壺(120)がある。口縁部には篋による縦方向の沈線、ハケの押圧による縦方向の沈線が施され、波状文を施すものは極めて少なくなる。段部に文様を持たず無文のままのものもやや多くなり、省略化が見られる。頸部のハケ整形の際に、ハケ目を文様風にきれいに残すものが多くなる。

壺B (119-141-142-274-345) 大型壺が少なくなり小型壺が主体となる。基本的にはI期と変わらないと思われるが、全体に体部の張りが弱く、I期のような力強さが失われてくる。口縁部が大きくラップ状に開き、朱を施したもの(142)もみられる。文様帯は頸部にあるが、無文のものが多く約半数を占めるようになる。

甕Aa (260-305-385) 超大型(305)・大型(260)・中型甕(385)がある。基本的にはI期と変わらないが、口縁部と体部の張りがやや弱いもの(385)がみられる。最大径が口縁部にあるもの(260)もみられ、I期のような統一性が失われてくる。

甕Ab (79) I期と大きな差はみられないが、数量は極めて少なくなり無文である。

甕B (147-148-153) I期とほとんど変わらないが、口縁部が短くなるもの(153)がみられ最大径の位置は一定しない。

甕C (206-351) I期のものと酷似しており器形の差はみられない。

甕D (156-157-175) 基本的には甕Cに似るが、口縁端部がやや内傾する。中型((156-175)・大型甕(157)があり、内・外面ともヘラミガキが密に施され、胎土も精選されており焼成良好な土器である。

甕Ea (146-200) 中型甕2点がある。器形はI期と変りはないが小型化する。

甕Eb (381-382-384) 中型甕のみである。器形の短いずんぐりとしたものはないが、底部が直立し肥厚するもの(382)がみられる。

甕F (383-406) I期よりも肩の張りがやや弱くなる。中型甕にみられ器形もやや大きくなる。

高坏A (167) 坏部上半を欠損しているが内・外面とも朱の塗彩がみられる。

高坏C (165) 坏部下半を欠損しているが内・外面とも朱の塗彩がみられる。

III 期

器形はII期に比して口縁部・体部の張りが弱くなり全体に力強さが失われてくる。文様は簾状文が消滅し変わって横線文が出現する。また口唇部刻目、T字文が消え、文様の主体は波状文となる。波状文の簡略されたものと思われるJ字状の櫛描文がみられるなど文様の省略化が進み、無文土器の占める割合はさらに多くなる。波状文の畿内型と中部高地型との比率は7:1と畿内型がさらに減少し、中部高地型が圧倒的に多くなる。

壺A (2-3-180-209-242) 大型壺はみられない。口縁段部はハケの押圧による縦方向の沈線(242)か無文のものが多くなり、III期までみられた波状文は消滅する。口縁部から頸部のハケ目を文様風にはっきりと残すものが一般的となる。

壺B (5-240-243-244) 大型壺(240)は少なく小型壺(5-243-244)が主となる。最大径は体部中頃か下半にある。文様帯は頸部にありJ字状の櫛描文、横線文、波状文が施され、波状文の振幅は小さく力強さを失ってくる。

甕Aa (100-101-103-189-190) 大・中型甕がある。I・II期に比べて口縁部の外反・体部の張り出しが弱まり、頸部のくびれが浅く全体に締まりがなくなる。口縁部が短く外反し、体

部が強く張り出すために壺に近い形状を呈すもの(189・190)がみられる。

甕Ab(57・93・303) 中型甕のみみられる。I・II期に比較して口縁の外反および、体部の張りが弱く全体に締まりがなくなる。最大径は口縁にある。

甕B(218・301) 基本的にはI・II期と変わらないが、頸部内面に鋭い稜をもち、そこから口縁部が外反する。最大径は体部にある。

甕C(188・251) I・II期とほとんど差はみられないが、口縁部が短く強く外反するものが(251)みられる。

甕G(245) 口縁部破片が1点みられるのみである。寛による平行沈線が3本施される。

鉢B(232・255) 内外面とも密なヘラミガキが施される。(255)は片口となり内外面とも朱の塗彩が行われる。

鉢D(254) 脚部はゆるいカーブを持ち、口縁端部は強く外反する。脚部には三角形の窓が穿たれる。内外面とも朱の塗彩がみられる。

IV 期

III期までみられた波状文も消滅し、全ての土器が無文化する。口縁部から底部にかけてヘラミガキが密に行われ、胎土も精選されており焼成は良好である。壺Aが消え新たに壺Cが加わる。高坏は全体に小型化するが、量的には増大する傾向をみせ4期中最も多い。

壺B(50・354・355・364) 最大径は体部下半にあり、口縁部は短く外反し頸部と胴部の接点はこの字状に強く屈曲する。

壺C(356) 口縁部の内外面は横方向のヘラミガキが丁寧に施され、頸部には口縁部と体部を接合した時のハケ目が文様風に残されている。

甕Aa(51・60・236・298) 口縁部が短く外反し、体部が強く張り出すため壺に近い器形となる。

甕B(216・300・357・366) 口縁部から頸部の器形はII・III期に酷似する。体部は球形状に大きく張り出し、器高は比較的短い。

鉢B(368) 小型鉢がある。朱の塗彩はみられない。

鉢D(54) 小型鉢がある。底部は丸味を持つ。

高坏A(64・302) 2点あるが、(302)は坏部と脚部の接点で段状になり角張るため、坏部内面の底部は水平になる。

高坏C(55・63) 2点あり、両者とも内外面に朱の塗彩が行われる。

高坏D(62・63・217・360・370) 口縁部が内湾するもの(62・217)と、そのまま開くものがある。(217)(370)には内面に朱の塗彩が行われる。

以上I～IV期の概略について説明したが、再度、壺と甕についてそのまとめを行ってみたい。

壺 Bが全期を通じて主体となる。

I期では、大型壺が多い。体部が大きく張り出し、球形状・ソロバン玉状・肩の張るものがある。文様帯は、Aは口縁部と頸部にあり、口縁段部には波状文が施される。Bの口縁端部が

三角形状に張るものにも波状文が施され、口縁部に波状文を持つものが特徴となる。頸部の文様帯は壺と同様波状文を基本としながらも、簾状文・短線文・円弧文・T字文を複雑に組み合わせ用いるのが一般的である。波状文は畿内型と中部高地型があるが、畿内型の方が6:1の割合が多い。

II期では大型壺が減少する。体部の張りが弱まるものが見られ、ソロバン玉状に強く張り出すものが消え全体に力量感が失われてくる。文様は単線文・円弧文が消え、Aの口縁部の文様は波状文が減少し、変わって縦沈線または無文のものが見られる。頸部に文様を施さないものが増え、全体に文様の省略化が見られる。

III期では、大型壺はごくわずかとなる。体部の張りが弱く、球形状に丸くなるものが多く、力強さは失われる。Aの口縁部は無文のものが多くなる。頸部の文様は波状文が主体となり、波状文は振幅の少ない弱々しいものである。また、無文のものが占める割合も高くなる。波状文は畿内型が減少し、中部高地型が3:1の割合で多くなる。

IV期では、大型壺が消えAも消える。文様は省略され無文化し、ヘラミガキが密に行われる。口縁部は短く外反し頸部は立ち上がりきみとなるため、体部と頸部の接点の内側には鋭い稜が付くものが多くなる。体部は丸く大きく張り出す。

壺 Aaが全期を通じて主体となり、それに付随して各器種が加わってくる。

I期では、口縁部と体部が強く張るため頸部のくびれが深くなる。文様は波状文を基本としながらも、簾状文・短線文・円弧文・口唇部の刻み目文が多く用いられ複数の文様を組み合わせるものが多い。波状文は畿内型と中部高地型が同率で用いられる。

II期では、I期とほとんど変化はないが、口縁部と体部の張りがやや弱いものが見られ、I期のような統一性が失われてくる。Abが減少しAcが消え、新たにDが加わる。文様は短線文・円弧文が消え、簾状文が減少し文様の省略化が見られる。波状文は畿内型が減少し、中部高地型が多くなる。

III期では、口縁部と体部の張りが弱まり全体に力強さを失う。Abがやや増えB・Cが減少しD・E・Fが消え、新たにGが加わる。全体に器種の減少が目立つ。口縁部から頸部にかけてハケ目を文様風に意識的に強く残すものが多くなる。文様は省略化が進み簾状文から派生したと思われる櫛描横線文と波状文のみとなる。波状文は全体に帯数が減少し2~3帯が主となる。波の振幅も小さくなり力強さが失われてくるものが見られる。

IV期では、I~III期まで主流を占めていた波状文も消滅し、すべての土器が無文化する。内外面ともヘラミガキが密に行われ胎土も精選され、焼成は良好のものが多数を占めるようになる。口縁が短くなるため全体に壺に近い器形となる。器種はAaとBのみとなり器種の減少がさらに進む。

3. 弥生土器の位置付け

前項において、各器種が器形・文様構成ともに変化が見られ、時間差としてとらえることが

できたので、ここでは他地域との比較の中で編年の位置付けを行ってみたい。

I期の口縁部に有段を持ち、体部がソロバン玉状に張り出し、波状文と短線文・円弧文・篋状文の組み合わせを持つ壺Aは、伊那谷における座光寺原式土器そのものか、これに近いものである。壺Bに見られるT字文は箱清水式土器そのものである。甕Fに見られる口縁部の外反および頸部から体部への張り方は、箱清水式土器そのものか近似するものである。甕Ab・Cに見られる口縁部から体部の張り方は座光寺原に近いものであり、中でも甕Cの(273)は座光寺原式に伴出するものである。甕Aaは口縁部の外反および頸部から体部の張りは千曲川流域の後期弥生土器に近い要素が見られるが、文様構成は伊那谷における後期弥生土器に類似するものであり、両地域の要素が融合し合っているものと思われる。このことは甕Ac・Ea・Ebについても言えることである。壺Bの(66)は口縁部から頸部に節による縄文風の刺突を行っている。これは中期に多様される縄文を意識したものと思われ、類例は千曲川流域の吉田式土器に見られる。また、甕Bの(414)に見られる口縁部がやや肥厚し、頸部がくの字状にやや強く屈曲し体部が強く張る器形は、やはり吉田式土器に類例が見られることから、中期末と橋原I期を埋める後期初頭の要素を持つ土器と思われる。これに伴出する土器は、橋原I期に含まれるものであるので、ここでは一応橋原I期としてとらえておきたい。

II期の壺Bの(142)は朱を施し、口縁部が大きくラッパ状に開く器形は、箱清水式土器から御屋敷式土器の特徴をよく現している。I期と比較して全体に器形そのものには大きな変化は見られないが、文様構成では円弧文・短線文が消え中島式土器の特徴を強く現わしている。

III期は器形・文様ともI・II期より省略化が進んだものであり、甕(251)は中島式土器そのものである。文様構成は中島式土器後半の様相を示している。甕Gの(245)に見られる口縁部に有段を持ち段部に篋による横線文を施すものは、北陸地方の古式土師器に近いものである。類例は、諏訪郡下諏訪町の稲荷平遺跡に見られ、すでにこの時期には古式土師器の洗礼を受けていたものと思われる。

IV期は、すべての土器が無文化するが、高坏Cの(55・63)のように古い要素を持つものも共存する。壺Cの(356)にみられる口縁部の内湾は東海地方の欠山式土器に共通するものであり、県内では長野市の四ツ谷遺跡に類例が見られる。壺Bに見られる口縁部の外反および頸部から体部の張りは、岡谷市の新井南遺跡2号住居址出土の古式土師器と強い共通性をもつものである。高坏A・Dについても同様である。新井南遺跡ではS字状口縁をもつ甕を伴っているが、当遺跡では見られない。むしろ高坏Cのように、より弥生的要素を持ったものが共存していることから、新井南遺跡2号住居址よりも一段階古い時期に位置付けられるものと思われる。以上述べたように当遺跡の出土土器は主流を占める甕Aaに代表されるように、千曲川流域と天竜川流域との影響を複雑に受けた、独自性の強いものである。おおむねI期は座光寺原期、II期は中島期前半、III期は中島期後半、IV期は古式土師に位置付けられるものと思われる。

従来、諏訪地方の後期弥生土器は岡屋遺跡5号址および海戸遺跡の弥生式土器第3類を基準

として、岡屋式土器と総称されている。そこに見られる壺は、口縁部が有段となり段部にラッパ状に大きく開くものがある。頸部に施される文様は、波状文・簾状文・円弧文の組み合わせが見られる。甕は口縁部と体部が強く張り出し、頸部が大きく頸びれ、そこに施される文様は波状文と短線文の組み合わせが見られる。これらの器形・文様構成はまさに橋原Ⅰ期に含まれるものであり、従来の岡屋式土器は橋原Ⅰ期に包括されるものと理解したい。

参考文献

- 伊藤正和 『岡屋遺跡(第2号)』 1960
 神村 透 「中部高地」 『日本の考古学』 Ⅱ1966
 桐原 健 「弥生式遺物」 『海戸』 岡谷市教育委員会 1967
 今村善興 「飯田市座光寺原遺跡」 『長野県考古学会誌』 4 1967
 宮沢恒之 「飯田市中島遺跡」 『長野県考古学会誌』 4 1967
 桐原 健 「長野県下諏訪町富部稲平遺跡調査概報」 『長野県考古学会誌』 5 1968
 大沢和夫他 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——上伊那郡辰野町その2」
 樋口内城遺跡 1973 長野県教育委員会
 佐藤勲信 「的場」 松川町教育委員会 1973
 笹沢 浩 「入門講座・弥生土器——中部高地3」 『考古学ジャーナル』 134 1977
 宮沢恒之 「遺物にかかわる諸問題」 『高松原』 高松原遺跡調査団 1977
 笹沢 浩 「弥生時代の遺構と遺物」 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——岡谷市その4』 志平遺跡 1980 長野県教育委員会
 矢口忠良他 『四ツ谷遺跡』 1980 長野市教育委員会

第4節 弥生時代住居址と集落 ——遺構の分析と場の設定——

1. 住居址の概括

橋原遺跡の発掘において発見された弥生時代住居址は重複したものも含めて、総数58棟であるが、攪乱、重複等で実態のない例—東から1、54、2、5、37、48、47、51、56、39、40住の11棟を除いた47棟において分析し、弥生時代後期の住居構造の復原を試みた。(第3・19表)

(1) 住居址の長軸方向と規模

竪穴住居址の形状は例外なく隅丸長方形であり、若干、形の不整形な例(20住)もあるが、本遺跡では黒色土中の確認作業であったため、竪穴形状は厳密な正確さはない。また長辺と短辺の比が1.05~1.06の場合は正方形といってよいかもかもしれないが、柱の配置は長方形をはっきり示す。そのため、ここではすべて長方形に一括して、長辺=長軸の方向で住居址の「向き」を示した。63・36住を除いて、他はこの長軸方向のいずれかの側に炉が設けられる。

住居址の向きは南北方向が6棟、東西方向が41棟、中間が1棟である。南北方向の住居址は仮に68住と70住を境に東群と西群に便宜的に区分すると、不確定な16住を除けば、東群に集中する。

竪穴の大きさは、竪穴形状が長方形であるため、単純に長辺や短辺の比較では示されない。

より方形に近い例(24住)と、極端に細長い例(6住)は空間の利用に差があるように思われるからである(第3表)。

長・短辺の比は6住の1.87を最大とし、次いで32住(1.56)、4住(1.52)、64・68住(1.43)である。最小は49住の1.05以下、10住(1.06)、17住(1.12)、62住(1.14)であり、平均は1.32である。これによると、長方形→正方形の間に相当バラエティーが見られる。とくに東群は顕著であるのに対し、西群は比較的に斉一性が強い。

長辺の最大は4住が9.22m、24住が9.18m、6住が8.80mと、平均の5.64mをはるかにしのぐ長さである。短辺の最大はこれに準じて、24住が6.67m、4住が6.07mであるが、6住は、4.70mと平均の4.20mと大差ない。このことから短辺の長さは、それほど大・小の住居において差のないことが判る。

小形住居は、長辺の最小が63住の3.04m、以下61住(3.42m)、41住(3.80m)、66住(3.62m)である。短辺の最小はやはり63住で2.44m、次いで61住(2.77m)、66住(2.97m)、41住(3.0m)である。

面積は長辺・短辺の大きさはそのままに、24住が61.23 m^2 (18.6坪)と最大であり、4住、6住がこれに次ぐ。最小面積は63住の7.42 m^2 (2.2坪)と24住の1/8以下である。長辺・短辺とも明確な30棟の平均は25.56 m^2 、62住が最も近い大きさであり、32・35・58・59・64住がほぼ近接する大きさである。41住を例外として、東群は大形住居が目立ち、西群は小形住居が多い。

(2) 主柱穴の位置——内区と外区

獨立柱の主柱穴は49・24・4・35住の4棟が6本、6住が8本、この他は4本以下である。24・4・6住は大形住居址であり、柱の数が多のも当然であろうが、49・35住は平均の大きさに近いので、中間の柱は間柱のような存在であることも考慮しなければなるまい。

柱の位置は、壁と柱の距離によって具体的に示されるが、ここでは、主柱に囲まれた区画を内区、その外を外区と呼称して面積の比較によって柱の位置を比較してみた。内区面積の最大は24住の21.73 m^2 、以下4住(21.06 m^2)、43住(15.26 m^2)、6住(14.0 m^2)と竪穴面積の大きさに準ずる。最小は61住の3.29 m^2 であるが、以下20・68・70・59住が4.23~4.68 m^2 にあり、必ずしも住居址の小形と対応しない。これは内区と外区的面積を比較するとはっきりしている。68・59住は、内区：外区が1：4.24~3.54である。つまり、普通には竪穴規模が大きくなると柱穴間距離も広がり、内区面積も大きくなるのであるが、必ずしもそうではなく、竪穴の大きさに比べて柱穴間距離の小さな(内区面積の小さな)一群が存在するということである。59・68・58・62住がそれである。東西両群の中間地点に多い傾向がある。

内区面積は主柱穴4本が明らかな33棟の平均が8.48 m^2 、外区面積は主柱と壁の明らかな27棟の平均が17.37 m^2 、内・外区の比は1：2.05、内区は外区の1/2の面積であり、竪穴：外区：内区的面積比は3：2：1である。ちなみに竪穴の平均面積は25.56 m^2 である。

ところで竪穴の面積に対し、内区的面積が極端に小さいということは、68住などの場合は、柱穴間距離の短辺の間隔が非常に狭くなっているからである。つまり竪穴の形状よりもはるか

に長方形配列になっているということである。全体に堅穴の長・短辺比より、柱穴間距離の長・短辺比が大きくなるが、全く等しいのは3住だけであり、堅穴の形状と柱穴の配列はあまり意識されていないことが判る。上屋構造と関係があるのであろうか。

ところで主柱穴の形態について簡単に触れておこう。ここでも他遺跡に見られる超扁平な主柱穴例がいくつかある。割材を用いていることが指摘されているが、4本とも割材を用いたと思われる例は60住である。本址は掘り方に黄色土を詰めて柱を埋め込んでいる状態がよく観察されたが、非常に薄い板材を用いていることが想像される。

ただし、楕円形の柱穴がすべて割材ではなく、柱の建替等による柱穴の重複を考慮しなくてはいけないことも判った。49住(P₉)では、楕円形の柱穴に丸太材を柱として埋めている状態が柱穴上面の貼床から観察された(丸太の径は18cmである)。割材を用いた住居址は西群に多い傾向がある。

(3) 炉の位置

63住以外は、長軸方向のどちらかの側、あるいは両方の側に炉が設けられている。重複・攪乱等による不明のものを除けば、50・41住の他はすべて炉の形態が埋燵炉である。50住は全く炉が不明、41住は地床炉である。大部分が主柱間の中間点にあり、柱穴を結ぶ線上の内外をそれほど離れない位置にある。

長軸方向の両側、相対する位置に炉のある例は8例——33・5・3・4・6・7・55・22住であり、実に22住以外は東群の住居址である。この8例の場合、それぞれの焼土の量と埋設された土器の周囲の床の状態を比較すると、片側は焼土が多く、特に土器の回りに詰っており、堅い床面が広い範囲にわたって見られず、多くが壁際まで床がない。これに対し、一方は焼土の量は土器の内に若干見られる程度であり、全くないものも見られる。床は土器を埋めた掘り方部分だけぬける程度であるか、4住例のように、やや通常的位置をはずれるなど、両者には大きな違いがある。ただし22住だけは例外であり区別がないので除外するが、これだけ性格の差が明らかな以上、同一の機能の炉とみなすことはできない。使用目的は明確に区別されていたと考えられ、焼土の少ない方は明り採り程度の炉であろうか。

炉が片側のみにある場合、往々にして反対側柱穴間の、炉と対になる位置に小さなピットのある例が49・24住など10住例ほど認められる。4住例は、土器が埋められていないものの、ピット底面に焼土が厚く見られ、土器を抜かれた埋燵炉のごとき状態である。24住例(P₁₀)もわずかに焼土と土器片若干が検出されている。埋燵炉に同じか、それに代わるものと考えてよいかもしれない。

炉内の土器は、基本的に底部の欠けた腹胴部以上を、口縁を上にも埋設している。底部の完存する例は49・9・67住のみであるが、炉の土器の底に破片を敷き詰めた例が24・6住などの10住例ほどあり、本来的に土器内は中空になっているべきものであることが判る。焼土の在り方は、土器の回りに詰められたように多く見られるので、もっぱら土器内かその周辺で火が燃されたようであり、土器の縁は炉面より上に出ていた(土器の周囲が凹んでいた)と想像される。

炉の土器の周辺は、広い範囲にわたって堅い床が見られず、囲炉裏のように、適当な空間が設けられている。この床がぬける部分には炭化物や焼土が多量に混在する場合が多く、そのまま壁まで堅い床が見られない場合が多い。

ところで、炉と壁の間に柱穴がいくつかある例がある。炉の状況からは、焚火はかなり強度であったことが想像され、屋内の炉で煮炊きと保温と明り採りがなされていたと思われる。その時、炉の壁際の天井部は入母屋風の屋根であったならいささか低すぎるのではないだろうか。これは炉の位置が柱穴間かもしくは外に寄る例ではなおさら気になることである。この場合、炉と壁の間の壁際に並ぶ柱穴は、天井部の煙出し窓を作り出した柱と解釈できないだろうか。このような柱が炉のそばにある例は、1本——11・14・22・33・41・43・59・60住、2本——28・19住、3本以上——21・64・6住である。(6・28・33住は重複する住居があるので明確ではない)この他に15・24・34住も想定できるが擾乱等でもう一つはっきりしない。

(4) 壁際のピット・溝・段

壁下に掘られた、柱穴とは区別される円・楕円あるいは溝状の細長いピットが存在する。8・28住では南西コーナーのピット内から小形手捏土器が出土しているため、その存在が注意されていたが、確実なピットの用途を把握するまでには至らなかった。

ピットの位置は南壁中央下と各コーナーに見られるが、南壁中央下あるいは南西、南東コーナーにある例が29棟と大部分である。炉のない側に設けられている傾向が非常に強い。

特異なピットとしては、6住と12住の北東コーナーのピットに粘土塊が詰っており、6住のもう一つのピット縁からは小形手捏土器が出土している。この小さな土器は8住の南壁中央のピット内から2点、28住南西コーナーのピット内から1点が出土した。小形手捏土器との関連が強いように思われる故縁である。また、66住南西コーナーのピットは、周囲に低い土手状の帯がめぐる。袋状になる例は10住南西コーナーが唯一例である。このピット内埋土からは多量の炭化米が検出されたが、64住南東コーナーのピット内にも、多量の炭化米が検出されている。

このピットの性格については、貯蔵穴説・入口の梯子受穴説等があるが、これについては出入口部の分析とともに再述したい。

その他遺構に溝と段がある。周溝を持つ住居址は一例も見られず、わずかに10・17・62・64住において、一辺の壁下に見られるだけである。10住は北壁下に、おそらく傾斜面のため、土盛りをした壁の土止めの標一矢板の跡であろうか、17住と64住は南壁下にある。62住は西壁下と、これに交差して、北西主柱穴に交わる方向に1本の溝が走る。柱と壁の間に根太を埋め、高床あるいは間仕切りの施設をしたのであろうか。(62住のこの溝は後に貼床で埋められてしまう)

同じく62住には、北壁の中央から西端に低い段(高さ6cm)が張り出している。ちょうどこのレベルには貼床が壁に沿って細長く認められたので、所謂ベッド状遺構と称される遺構の一部分であろうか、しかし、なぜこのように細長く残るのか意味不明である。

(5) 出入口——戸口施設

橋原の竪穴住居は総じて残存壁が低いが、黒色土層円での検出が原因するだけではなく、黄色土層に掘り込んだ場合でも、17住や57住は非常に浅く、特別な戸口施設が設けられたかどうか疑わしいほどである。その中でも62住が最も深く、残存壁は60cmを計り、このように深い竪穴では当然、出入りの施設がないと不便であり、梯子あるいは階段を想定しなければいけない。62住には南壁側に確実に戸口と思われる遺構が認められるので、こうした例から戸口の位置を推定してみた。

a. 梯子受け穴を有する例 下伊那地方や山梨県金ノ尾遺跡例のように、壁近くに外を向いた柱穴は梯子(丸太にステップを刻む)を埋め込んだものとされている。斜めに差し掛けるため、ピットは外を向く方向に斜行しているが、このような例は当遺跡では66住の南西コーナーに一つ見出すだけである。このピット(P₃)は帯状にめぐる低い土手の中に、壁際のピットに隣接しており、南壁外を向いている。P₄もスリ鉢状であるため、可能性がある。(P₃については支柱穴の1本とするべきかもしれないが対応する南東支柱穴位置に柱穴が見られないので、ここでは一応柱穴から除外して考えた。)

b. 溝とピットのある例 巾50~140cmの短い溝が壁から離れた床面に張り出したようにあり、必ず小柱穴、コーナーのピットを伴う。溝は土止めの櫛、柱穴は入口の柱と考えられる。

62住は南西コーナーのピットから南壁に平行に溝が走り、溝と壁の間に小柱穴2個がある。本址は堅い床の上に貼床が認められたが、この溝の部分とピットの部分には貼床がなかった。この溝の東に壁からカギの手状に張り出た溝は貼床の下にあり、古い時期のものと思われる。ここを戸口の階段とすると、コーナーのピットは、吹き込んだ雨水の水抜き壇という考え方もあながち捨てがたいと思われるがどうであろうか。

17住は62住に類似のピットと溝(巾100cm)が南壁東端にある。43住は巾130cmの溝、南西コーナーの堅い床と軟らかい床の境にあり、溝の西端に小ピットが4個並ぶ。東にやや離れてピット(P₁₀)があるが、入口の柱に関係するのであろう。22住は南東コーナーに小ピットをつなぐような溝がある(110cm)。南壁の上に平たい大きな礎を据えているが、入口の踏石であろう。

22住は入口から見て両側に炉がくるが、62・43住は炉の反対側空間に戸口があることになる。

c. 戸口が張り出す例 南壁の中央がわずかながら外に張り出す場合がある。10住は二段に凹んだピットと階段状に低く張り出した段があり、この部分に貼床が認められた。貼床の下には、壁に沿って溝があり、ピットにつながっている。張り出しの長さ240cmとやや戸口とするには広すぎて、壁の崩れともとれるので、出入口は貼床部分(100cm)と思われる。24住も巾広く張り出しがあり、やはりピットが存在するが、重複がはなはだしく、ややわかりにくい状態である。ここではピットの一部上面に貼床が認められた。

d. 貼床(二重床)をもつ例 入口の階段、あるいは梯子を降り立った位置は外から持ち込まれた土がたまって、床が厚くなるはずである。このような状況がいくつかの住居址において

貼床、あるいは二重床として記録された。中でも、前記24住は南壁中央から内区に向けて貼床が認められ、壁際ほど厚く、内に入るほど薄くなることが確かめられた。(写真14)

64住では南壁東隅に溝とピットが集中するが、貼床はこの南東コーナーの主柱穴の西側床上下と、中央やや西寄りの床上に認められた。59住は中央の南壁寄りの堅い床と軟らかい床の境付近に150×110cmの範囲に床が二重に検出された。壁からやや離れるが入口に関連するのであろうか。11住は南側半分がそれほど堅くはないが、二重に床が存在した。ここを土間とすれば、直結する出入口として南壁東のピットは梯子受けの可能性が強い。

これらとは若干相違するが、4住は竪穴南西部に黄色土を貼って堅い床の上にもう一枚床を設けている。同様の例は19住にも見られる。19住は二重の床ではないが、南西および南東コーナーに部分的に黄色土を用いて床を作っているのである。これらも、戸口部と関連がありそうである。

e. 小柱穴が並ぶ例 入母屋風の小屋構造であったとすると、戸口部は出窓様に作り出さないと雨水は相当量が流れ込んでしまう。この戸口部の屋根を支える柱と思われる柱穴が2本、壁際に平行して並ぶ例がある。

60住は南東隅のピット(P₁₃)と対峙して南壁中央側に小ピット(P₁₀)があり、この間に壁からやや離れて2本の柱穴(P_{11,12})が壁に平行に並ぶ。外側の柱穴間隔は190cm、内側は80cmである。東側主柱穴2本と、戸口の柱(東側)は一線に並び、南壁下には溝もあるなど、出入口部として十分に考慮され得るのではないか。これも炉と反対側の空間に直結する戸口である。また、本址はこれと相対する北壁に同様に柱穴が2個並び(P₁₈・P₁₉)、これも出入口とする考え方もできるが、柱穴2本だけでは説得力に欠ける。むしろ、棚あるいは中二階といった小屋構造の中で考えるべきであろう。

68住は壁際に柱穴2個が西壁南寄り(P₃・P₁₆)と東壁中央(P₉・P₁₁)に並ぶ。東壁際にはまだ他にも柱穴が並ぶ(P₁₉・P₈)ので、この場合はどちらを入口とも決めたい。

2. 竪穴住居の床面の堅さと柱穴の配置からみた場の区分

(1) 堅い床と軟らかい床の範囲

竪穴住居の床は地面をそのまま土間として使用されたといわれている。構築時における程度タタキしめて、平坦な堅い床を設けているであろうが、生活の営みの中で、例えば、日常の出入口のように踏みしめられて、より堅くなった部分があることは容易に想像される。いわば住居の使用痕である。竪穴の遺構以外に、上屋や棚施設等、木材部は残らない以上、床面の踏みしまり具合から、竪穴内の生活痕一居所・寝所の一場を探る試みを行ってみた。

再三繰り返すが、橋原は大部分が黒色土中に竪穴の掘り込みがあり、床は黒土をタタキしめているだけで、黄色土を敷きつめた貼床は部分的にままだ見られるだけである。そのため壁のはっきりしない竪穴住居址では堅い床の範囲で住居規模を推測したが、そうした作業の中で竪穴内にタタキしめられた堅固な床と、それが全く見られない軟らかい床とが極端に峻別されるこ

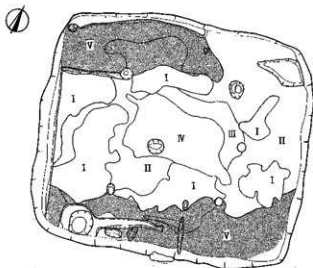
とが注意された。このことは、黒色土の床であることがかえって幸いしたともいえる。褐色土、黄色土（ローム）の床ではこの区別はあっても、一線では分けずることはかえってむずかしかったからである。黄色土層を掘り込んだ住居址では、特に堅い床、堅い床、やや堅い床、堅い床のない部分というように区別されすぎてしまう。

炉の周囲の床は、炉の項で述べたように広い範囲に堅い床が見られない。ある程度の凹みになっていて、灰をためていたと思われる。住居址によって広さは異なるが、炉から壁の間の「床なし」はここでは特に問題にしない。また、壁下はある程度の中まで堅い床が見られない。これは62住を除いて、例外ないことなので、これも特に問題にはしない。

床の堅さは、床面の堅さであって、タタキめられたような、移植ゴテで削っても、覆土が剥ぎ取れる面がある場合を堅い床とした。特に堅い床は水洗いしても崩れることはない。軟らかい床は、色調に差がなければ床とわからないほどであり、床面がない、あるいは床なしということである。ただし、穴があいているわけではないので、床なしという表現は誤解を招く恐れがあり、軟らかい床とした。この両者の区別は問題なく、簡単に峻別される。

堅い床は、住居址によっては、3～4段階に堅さの違いが区別された場合もある（第140図）。この区別は感覚的に把握したものであり、線引の細部には絶対的な確証はない。各住居址実測図中の区別はおよその範囲を模式的に示したと受け取っていただきたい。

床面の堅さは大きく次のように4区別される。基本的には全体に堅い床が見られる(A)のであるが、中央付近に堅い床がない(B)、コーナーに床がない(C)という一群と、内区の広い範囲に全く堅い床が見られない一群(Bを含む)と、全体に堅い床面がない一群(D)に大別される。後



I 特に堅い床 II 普通に堅い床 III やや堅い床
IV 軟らかい床(タタキの面が全くない床) V 貼床

第140図 62住居址の床面の堅さ

者の二群は、数はそれほど多くない。

A. 竪穴全体に堅い床のある住居址

この場合でも壁際のある程度の中には不規則に堅い床がない——4・12・19・21・43・60・67・68住等（ただし当初は十分に観察していないので、24住のように記録していないものもある）。これらは床面の精査によって、さらに堅さの違いを分けることができる。例えば68住が典型的な床であろう。炉の周囲から壁際に堅い床が見られず、南東コーナーはやや広く床がぬけて、そこに粘土塊が置かれている。全体に堅い床は内区の中央柱穴周辺から炉の東側にわたって特に堅い床が区別される。この堅い床と南東コーナーの軟らかい床とは、柱穴列 P₁₀—P₁₃—P₈—P₉を境に平行している点に注意され、コーナーを利用して棚、高床施設があったと考えられる。北東コーナーは踏まれていないようであり、北西コーナーもあまり踏み固められていない。

60住は中央2本の柱穴付近から南側の範囲が非常に堅い床面となっている。次いで堅い床が北壁東寄りの柱穴に向かって若干のびている。この柱穴部分には何か特別の目的を見ることができそうである。

全体に堅い床を持つ住居は、6・4・24・43住の大形住居に顕著である。内区には主柱穴の他に間柱、あるいは間仕切り柱穴と呼ばれる柱穴列もあるが、柱の周りも、全く区別されることがなく一様に堅い床面である。大形住居は竪穴内が広い土間になっていたと言える。

B. 竪穴中央部に堅い床がない住居址

内区に全く床がなく、外区が壁際まで堅い例と、内区の中央部が不規則に堅い床がない例に分けられる。前者は10・57・62住に典型例を見る。

10住は4本の主柱に囲まれた範囲に堅い床が見られず、外区は壁下までしっかりとタタキしめられている。入口部は若干内区に張り出すが、それ以外に、内区には何らの遺構も見い出せないのである。炉は内区に入り、壁側は堅い床がある。

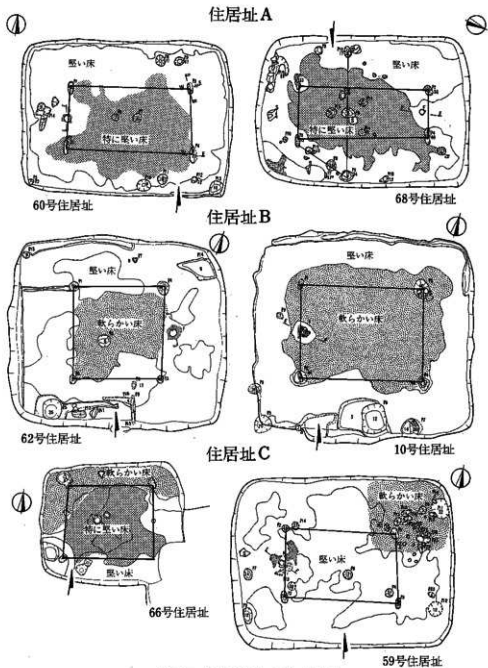
57住も全くこれと同じと思われるが、南側半分が攪乱によりないため断定できない。内区に床がないことだけは確実である。

62住は10住に比べ、黄色土層のためか外区の床の堅さに若干ムラがあり、中央に浅い柱穴が1本検出され、また溝があるなど若干異なる。

それにしても、内区は土間として踏みしめられていないということはどういうことであろうか。土間とさしてかわらない高さに、高床式の板床、あるいは土座を考える以外になさそうである。その場合、炉が床内に切りこまれていたことになるが、それでは近世に見る囲炉裏と同じことになる。床のないこの部分に、そこまで推察する痕跡はなく、62住の浅い凹みだけではいささか想像がつかないが、極めて特殊な住居である可能性が強いことは事実である。

64住と11住・7住は、細部は別にすれば、内区の堅い床がない状態は62住に似る。その上に64住は北西のコーナーに堅い床がないという性格が加わる。11住は北東コーナーに堅い床がない。

22住は若干異質で、中央の柱穴を境に、北側に堅い床がなく、一部北壁までのびている。本



第141図 住居址床面の堅さ (1/100)

址は南側半分に特に堅い床が広がり、北東コーナーから北側外区に堅い床がのびている。

C. 堅穴のコーナーに堅い床がない住居址

全体に床は堅いのであるが、コーナーの一角に広い範囲（主柱穴を含むくらい）に堅い床が見られない例がある。

このタイプは59住で明らかである。炭化米の集中が見られたのは北東コーナーとその付近であったが、北東の主柱の周囲も含め、ここだけ堅い床が見られない。本址は火災に遭遇した住居であり、そのまま遺物の出土状態を考え合わせると、このコーナーは米や雑穀類を置く場所——倉庫として、棚あるいは高床の施設があったと考えることができる。竪穴住居内に、小規模の倉庫を内包している構造であろうか。

32住は北西コーナーに堅い床がない。南壁際の中央辺りはギリギリまで堅い床があり、細長く北壁下までのびる。北東コーナーも堅い床がない。66住もやはり北西、北東の両コーナーに堅い床が見られない。14住は北東、北西、南西の各コーナーに見られないが、やや狭い範囲であり、換言すれば中央に堅い床のある住居ということである。北壁側は壁下まで堅い床がある。

68住も、全体に堅い床があるものの、踏みしまりの特に堅い床を見れば、南西と北東の両コーナーに堅い床が見られない。60住は北東、北西の両コーナーである。

D. 竪穴全体に堅い床がない住居址

63住・44住はタタキシめられた床面が全然見られなく、8住も部分的にかすかに検出されただけである。住居址の竪穴は検出できるのであるから、あながち攪乱によって床がなくなったとは言いつてもよいのである。特に63住は最小の住居であり、土間の使用が頻繁ではなかったか、土座のような高床施設を考慮しなければならない。遺物は石器類その他土製品等の出土はなく、土器は饗の少ない（高坪、鉢が出土）組成であり、しかも集落のはずれにあるなど特殊な使用を考慮する必要がある。

E. 貼床が広い範囲に見られる住居址

62住・33住に見られた貼床は、凹凸のはげしい、黒土のあまりタタキシめられた床ではなく、この種の床はかなりの住居址において二重床として、床上5cm内外に検出された。特に、褐色土と黄色土層を床とする住居では検出しやすかったが、生活の痕跡、すなわち屋外から持ちこまれた土の堆積として捉えてよいのではなかろうか。

33住は全面に堅い床があるが主柱穴と中央の柱穴群をとり囲むように、コの字形に貼床が見られ、東の戸口部は黄色土の貼床がその下に存在した。62住は、南壁側外区と北壁側外区にのみ細長い範囲に貼床があった。これによって入口の位置が南壁中央から西端に寄っているのが、改築または建直しが考えられる。奥の貼床は所謂ベッド状遺構に作り直したのであろう。33住の例は、31住との重複で北側の壁がはっきりしない点で明確さを欠くが、南東、南西両コーナーと北側・西側外区には踏まれていないことを示しており、中央の土間がなくなっていることが明らかである。

小結——床面の堅さからみた場の設定

全体に堅い床のある住居址(A)は、竪穴内の全体が土間として使われたと思われる。大形住居址に特にその傾向が強い。24・4・35・43住は炉の周囲の床も広くぬけないで土間の面積が広がっている。同じ大形でも、6住は二基の炉のうち、各々が極だった対照性を示す。片側の空間は土間として使われたが、それは、6住の粘土、砧石、43住の粘土、24住の砧石に見られ

るように、作業場の性格が強い。これらはいずれも東群の中心付近に集中する。

中央に堅い床のない住居址(B)は、10・62・57住は寝が少なく、高坪の出土する住居址であり、62住はその上に紡錘車が多量に出土しており、3棟とも集落のはずれに位置する。中央の高床に座する生活は、紡錘車、高坪、器台と結ばば女性、それも、特殊な女性の存在を想像せずにはいられない。巫女的な女性の家という特殊な住居を考えるのは、空想がすぎるであろうか。

この他に特殊な例として33住の貼床のある住居址(E)についても少し触れておきたい。貼床の下にはほぼ全面に堅い床が存在したが、この下の堅い床を築造時の床、貼床を使用の跡とするか、当初は全面に土間として使用していたが、次第に生活の営みの中で各コーナーや外区が戸口を除いて、棚、高床に変じたと見るか、意見の分れるところである。しかし、後述のように、中央柱穴の1本という単純な住居を基本とするならば、中央の無規則な配列は後者という「生活の中の変化」と理解しておきたい。なお、補足になるが南東コーナーはここでも斜めに柱穴が並び、68住に同じである。

(2) 柱穴からみた場の設定

堅穴内には、主柱穴の他に多数の柱穴が検出されている。上屋に関係するものもあろうが、内区の中央にある柱穴は、穴と呼んでよいか疑問なほどに、浅く、かつ底が床面と同じように堅い、凹みと称すべきピットである。掘立柱ではないことは明らかであり、上屋を支えるとしたら(例えば棟木・梁)、下から支える支棒のような役目しか果たさない。そのような柱としてはなにを考えたらいのであろうか。

柱穴の数によって4群に分類できる。

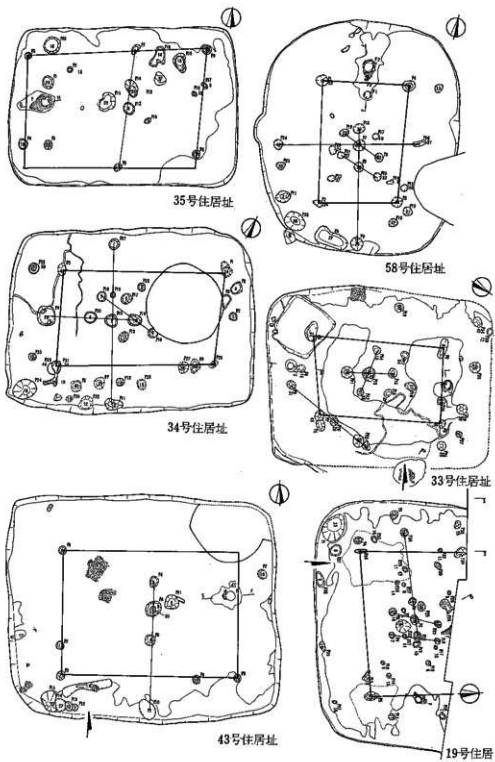
a. 中央に1本の住居址 長軸方向か短軸方向のどちらかの中心点にあり、両方の中心点、つまり堅穴の中心点にくるものはない。炉の側に寄る、逆に反対側に寄る、あるいは両壁側に寄るといった具合に、統一性は見られない。柱穴はやや深いものがある。

b. 中央に2本の住居址 2本が離れてあれば、どういう位置にあろうとも2本を結んで並ぶという表現になってしまう。しかし、60・70住は長軸方向に並び、64住は短軸方向に並ぶが、66・22・35住は斜めに並ぶなど、統一性もなく、2本ということは意味がないと思われる。本来、1本であったものが建替、修理等で位置が替った程度の差ではなかろうか。

c. 3本ある住居址 3本でも同じである。17・69・35住は長軸方向に3本が並ぶものの、直線上には位置しない。また17住のように、中央の3本のうち、東側の2本(P₇・P₈)は北壁際に並ぶ2本(P₁₀・P₉)と対にして考えた方が適切かもしれない。4本とも柱穴に比べると非常に浅い掘り込みであり、ほぼ等間隔に平行している。35住も1本は中の支柱の中間にあり、間柱のようでもある。やはり、2本、3本の数は意味がないようである。

d. 多数の柱穴が集中する住居址 内区中央に4本以上の柱穴が集中する例がある。大形住居に見られる中央の柱穴列とはやや異にする点は、一見無規則にかたまって存在することである。ただし、多数がかたまっているためか、3本を直線上に結ぶことはいくつかが可能である。

15住は大小8本の柱穴が、長・短両軸方向に直線上に結ぶことができる。ただし、外区の柱



第142図 柱穴の配置と住居空間の分割(1/100)

穴とは結べない。19住も多数が密集し、長軸方向の中線上に1列、短軸方向はやや斜めに2列が直線で結ばれる。これも外区の柱穴とは結ばれない。33住も19住に近似する。58住も類似するが、外区の柱穴と直線上に、長短両方向に並ぶ($P_{16}-P_7-P_{14}$)。34住は58住と同じである。中央では斜めにも並ぶ($P_{10}-P_{14}-P_{19}$)が、外区の柱穴とは並ばない。68住は多数があるものの、中だけでは並ばないが1本は(P_9)外区の柱穴2本と直線上に並び、中点に位置する。

ここで指摘できる点は、長・短軸方向に並ぶ場合、長軸方向の並び方は、炉内の土器と、あるいは反対側の炉と対峙する位置にあるピットとそれぞれが一直線上に位置する場合が多いことである。そして、内区に並ぶ3本のうち1本は、これを中点として対峙する外区の柱穴と一直線上に並ぶことが判った。

43住は唯一例、短辺方向に3本の柱穴が並び、さらに外区の柱穴と直線上に並ぶ。

(3) 大形住居地の柱穴と場の区分

主柱が6本以上ある大形住居は、4・6・24の3棟がある。特に細長い住居があり柱穴の配置を考えるうえでは好例である。

6住は主柱が8本あり、内側北の主柱間(P_2-P_7)には柱穴が1本あり、3本は一直線上にある。このような主柱穴間の柱は間柱と呼んでいる柱に相当するかどうか問題はあるが、便宜的にここでは間柱(まばしら)と呼称しておく。内区の柱穴は、この間柱を境にして、南に3本—これは南側炉と一直線上に、北に2本—これは北側炉と一直線上にあり、前述したようにそれぞれは独立していて、両者が一直線上にはない。これからして、本址は間柱を介した短軸方向の柱穴列によって南北の二室に分割されることが判る。「床面の堅さ」の項で述べたごとく、場の違いはここで区分されるのであろう。

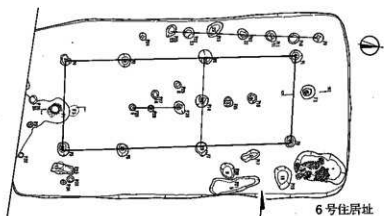
24住は主柱が6本であり、内区の柱穴は南北二列が認められる。北側の列は炉の土器と一線上にあり、南側の列は東の主柱間のピットと一直線上にある。内の主柱穴間(P_3-P_4)に間柱とするにはやや一線上からはずれるが、 P_{25} があり、外区にある $P_{23} \cdot P_{46}$ も主柱穴と一線上にあるので、やはり短軸方向に分割されるようである。

4住は主柱6本がいささか不整形の並びであるが、内区の柱穴が一線上にある。長軸の長さを分割する短軸方向の柱穴列は中の主柱 $P_3 \cdot P_4$ とその間の P_{25} がある。この他に強いてあげれば外区の2本と内区の1本が並ぶ($P_{11}-P_{24}-P_{12}$)。この他に間柱が入らないが外区の柱穴列($P_{10}-P_{11}-P_{13}$)と($P_8-P_{12}-P_{14}$)がそれぞれ対応する位置にある。

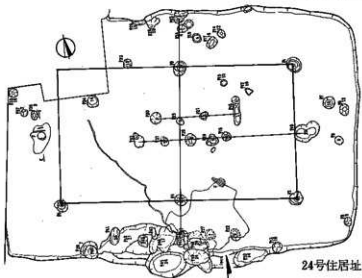
35住は大形住居に入らないが、主柱穴が6本あるので、一応分析しておく。内区の長軸方向の柱穴に並びは見られないが、長軸長さを分割する短軸方向で、中の主柱穴間に間柱がある。ただし、本址は4本柱であることも考えられる。

(4) 小結—床面の堅さと柱穴の配列からみた場合の区分

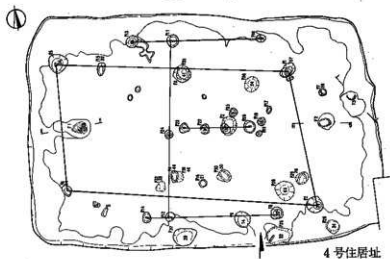
堅穴住居地の床面の観察と柱穴の分析を通して、堅穴住居の場の区分が可能かどうか、これまでに長々と書き連ねてきたが、床面の踏みしめられた跡と、柱穴の配置・配列の係りはどうであろうか。



6号住居址



24号住居址



4号住居址

第143図 柱穴の配置と住居空間の分割(1/100)

これまでの繰り返しになるが、内区中央の床に見られる柱穴は、1本も2本も、数の上には特に意味がないと思われる。多数の場合は、確かに長軸の中線が炉→内区の柱穴列と結ばれ、非常に意識されているが、内区だけで外区の柱穴とつながらない柱穴列は、住居空間を分割する間仕切りとはいえまい。単に、場を区分する衝立のような仕切りになってしまう。単純な1本だけある場合を見ても、中央に堅い床のない住居においても存在し(62・64住)、逆に、中央に特に堅い床が識別された住居にも存在する(60・68住)。そればかりではなく、コーナーに堅い床のない住居においても存在するのである。このことは土間の位置に関係なくあるということであって、住居空間を仕切ってしまう壁の柱ではないことは明らかである。大形住居でも、長軸方向に内区の柱穴が並ぶが、同様に、外区につながらない柱穴列では、空間を仕切る、あるいは完全に分断することはできず、やはり、間仕切りの柱穴とは考えることができない。

次に、堅い床面が全体にある住居について特に大形住居において特徴的なのであるが、典型的な6住に見るように、南・北の場が間柱をはさんで極めて対照的であることを指摘しておいた。すなわち、大きさは南側が柱間一つ分広くあり、炉の使用度は南側炉が強く、中央の柱穴列は一線上に並ばないなど、明らかな相違が表われている。このように間柱が主柱間に配される例は、4・24・35住の6本柱の住居に共通してみられ、またこの構造に類似した例として、壁際の対峙する柱穴が内区中央の柱穴を中点にして一線上に並ぶ場合がある——34・58・68住。内区に柱穴3本が短軸方向に並ぶ43住1例も加えれば、壁内を二つに仕切る柱穴配置は、かなり意識されていたと考えてよい。

6・24・43住では、作業の場の区分が可能なことを前に述べた。それは短軸方向の分割された空間をかたや炊事の間、かたや作業の間としたが、しかしこうした分離に、実際には堅い床面が全体に見られ、床面は全く無関係に、一様に、否、むしろ24住では中央ほど堅い床面が存在するのである。全体が土間として使用された状況であり、ここに壁の仕切りを想定して床を分けることは無理である。したがって、場の区分や設定に壁は無関係なことであろうか。6住のような場合は、壁ではなく3本の主柱、とくに間柱が、上屋を支えること以外に間仕切りの壁のためではなく、場を区分する柱としての意味を持っていると考えることができる。掘立柱ではない理由も、このように解釈すると納得できる。場を区分する間仕切り柱——間柱と仮称しておく。

住居址の中心部にある浅い掘り込みの柱も、大形住居と他の住居の中間的な性格を持つ34・35・58・68住の存在から、同じ間柱として理解される。

3. 壁内出土遺物の位置

(1) 遺物分布図の作成

今回の橋原遺跡の発掘調査では、住居址のプランを検出するために、表土剥ぎ後より土器片・石片等の遺物の出土位置を記録していった。その結果として遺物の集まるところに住居址が検出されただけでなく、その遺物の集まり方にもある種の傾向があるように思われた。そこで

それら住居址内から出土した主要な土器や石器と、その出土位置の傾向をまとめてみた。

遺物出土位置の記録については、先に述べたように住居址の検出を目的としたものであるため、遺物のレベルは測定せず、垂直分布は考慮しなかった。

ところで、遺物の分布を考える上で吹上パターン等の問題も含め、遺物の時空的所属については従来より指摘されていた課題であった。厳密にいうと埋竈炉以外は、その住居に遺棄ないしは廃棄されたものか断定することは現段階では困難なことといえよう。また、「原位置論」の問題が提起されて以来、発掘調査法の一つとして試みられている全点主義の記録は、今までの成果がまとめられていない現在、以下に述べる本遺跡での遺物の有り方より、ここではあえて遺棄された姿（原位置=in situ）として認識してゆくこともあながち無意味なことではないと考えた。従って一つの試みとして、種々の遺物の住居内で機能したであろうと思われる場の在り方を探ってみたい。なお、土器破片についてはプラン検出後はその出土地点を記録しなかったものがあるが、24・19・21住は全点の分布とレベルを記録した。

(2) 主な遺物の出土位置（第144～148図）

a. 土器破片の分布

資料には比較的遺存状態の良かった住居址を選んだ。土器破片は各住居址とも、竪穴内の主要遺物の出土位置近くに集中している。ただし、19・24・43・59住等遺物の出土が多く、破片が竪穴内に均一に散っている住居址では、壁ぎわに出土数が少ない傾向が見られる。（第40、144、146図）

また、全体として播磨遺跡の弥生住居址は、長軸が東西方向のものが圧倒的に多いが、住居址内南半分の西寄りに特に遺物が集中し、北辺東寄りに稀薄になる傾向がある。4・14・17・24・35住などに顕著に見られる。（第145・146）

b. 土器

資料には3分の1個体以上復原可能なものを選んだ。その結果、土器の出土が集中する場合は、

a. 埋竈炉付近に集まるもの

b. 埋竈炉からは離れたところに一箇所か二箇所に集まるもの

に分かれる傾向がある。それは炉の周辺と炉から離れたところの二箇所に土器の集中がある住居址のグループと、炉の周辺にはあまりかたまらず、離れたところに土器が集中する住居址のグループがある。そして、炉から離れて集中する場合は、埋竈炉とは反対の方に集まる傾向がある。15・17・19・21・24・43・46・55・58・59・68住に比較的顕著に表われている。この炉周辺の一群と、そこから離れた一群の、土器の組成は大差はない。今回の調査結果の土器組成を見ると、甕が圧倒的に多く、壺・高坏・鉢・甗などの割合が少ないが、それがここにも現れている。

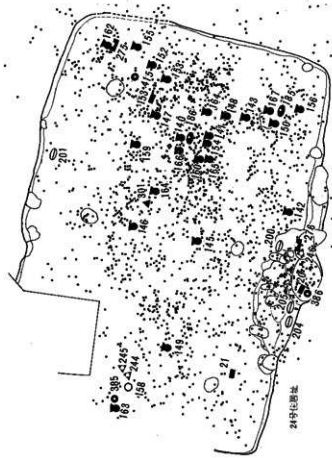
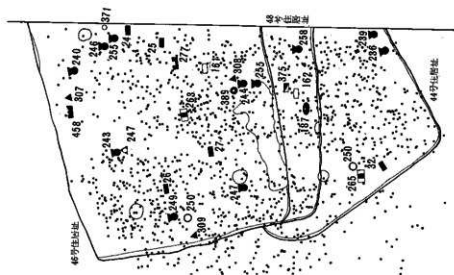
15・46・58住は埋竈炉の近辺に土器がなく、反対の隅に土器があるグループの仲間である。46住は西に炉を持つが、中央北寄りに一群、中央南寄りに一群の土器の集まりを持つ。58住で



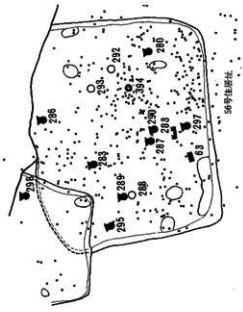
第144图 住居址内遺物分布图



第145图 住居址内遺物分布图



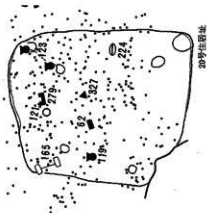
第146图 住居址内遺物分布图



第147图 住居址内遗物分布图



68号住居址



20号住居址



16号住居址

68号住居址

一活土器	磨製石斧	▲ 石 鏃	■ 鉄 製品
▼ 小型土器	□ たたき石	△ 磨製石鏃	○ ガラス玉
○ 縄文斧	■ 凹 石 槍	◇ 石 槍	
◎ 石 瓦 丁	△ 粘 石	／ 鏃	
■ 打製石斧	◎ 砥 石	○ 紡 織 車	

遺物分布図の縮尺は1/88、方位は北を上とする。

第148図 住居址内遺物分布図

は北に炉を持ち、土器は住居址南西隅に集まっている。

19・43・59・68住は、炉の周辺と炉から離れたところの二箇所に土器の集中がある住居址である。19住は東の炉に寝、南西寄りに寝が集まる。43住は東の炉周辺に寝が集中し、住居址北辺西寄りに寝や甗が出土した。59住は典型的であり、西側埋燵炉の西側に寝、鉢、完形大型の壺2点が集まり、また反対の北辺中央から北東コーナーには大型壺と小型壺、小型甗が3、4個体ずつあり、高坏、鉢も含めて集まっている。68住では北側炉の周辺に寝が集中し、南東寄りに壺や甗が出土している（第148図）。

また、少し特異な例として、6住は南北方向にのびる長方形大型住居址であるが、北と南の2基の埋燵炉の他にほぼ住居址の中央に高坏と壺形土器完形品があった。

24住は東西にのびる大形住居址で、西側の埋燵炉の周辺に甗があり、反対側中央から東側の2本の柱穴間にかけて土器が多量に存在する。甗が多数であるが、壺もかなり多く含まれている（第146図）。

62住は外区に堅い床が存在し、中央付近には床が抜けるという特異な住居址であるが、土器も少量ながら、堅い床の部分と重なるように出土している。組成は、高坏や壺、器台が主である（第148図）。

小型手捏土器：竪穴の北東から南西にかけて出土する傾向がある。8住出土の小型手捏土器は、南西の主柱穴内にまとまっていた。器種は高坏と壺である。28住でも南西コーナーのピットから出土した。6住では東側の入り口と推定されている近くのピットの粘土の中から出土した。小型手捏土器の用途を示すものだろうか。

紡錘車：紡錘車は住居址南半部に集まっているが、特に西から東へかけての壁ぎわに集中している住居址が多い。住居址中央部からの出土は少ない。62住は最も紡錘車の出土が多いが、いずれも堅い床の範囲と重なっている点は注意される。

c. 石器

石器の資料は、出土位置の明確なものだけを取りあげた。主な出土遺物としては打製石斧と石鏃が割合多く出土している。磨製石斧、磨製石鏃、砥石、石庖丁、敲石、砧石、凹石は各住居址に普遍的に出土してはいるが、絶対量は少ない。

打製石斧：全体的には住居址中央から南西にかけて出土する傾向がある。また住居址外にも多く出土する。一つ一つの住居址を取りあげてみても、どこか一点に集中するというよりも、中央から南西にかけて散在する傾向にあるようだ。完形品、折損品も含めているので、あまり意味がないかもしれない。事実、打製石斧は覆土上部の出土が多いのだが、22住では、東側炉の南辺に3点、南西柱穴傍に1点、計4点の打製石斧が出土している。炉辺のものは南東入り口（推定）部分との間にあり、炉に近い2点はいずれも完形で大型、使用痕がない。床上30cm余りのところから出土した。8住では、南壁ぎわに完形の打製石斧がほとんど折り重なるようにして出土した。床上25cm余のところである。

磨製石斧：扱った資料は8点であるが、いずれも住居址東半部に集まっている。強いて言え

は中央寄りに位置するグループと、東から南壁にかけての壁ぎわに位置するグループに分けられる。なお59住では入り口付近と推定される南壁きわ中央に炭化した柄と着柄痕のある磨製石斧が出土した。床上15cm余のところである。

磨製石鏃：扱ったのは6点。傾向を把むことは難しく、出土した同じ住居址内の他の遺物の集中の傾向と一致しているということがいえる。石鏃が多数を占める中で、少量の磨製石鏃には何か特別な用途を考えるべきであろう。21住では入口とされる南西コーナー付近床上20cm余で2点まとまって出土したが、62住を除いて、入口に近い主柱穴の近辺の覆土上部から出土している点は、少量とはいえ置かれた場所を推察する上で注意される。

石 鏃：どちらかというて散在していて、内区に多いかと思われる。これも出土したそれぞれの住居址の遺物の分布傾向に従っているものと思える。

砥 石：住居址の南半部に多く集中している。出土した同じ住居址内の遺物の分布傾向とは多少ずれた位置にあるものが見られる（19・22・43・58住）。24住では南壁の入口付近と思われる位置に、ほぼ床レベルから2点（荒砥と仕上げ砥）が一所にならんで出土したのが注目される。（第149図、写真13）

石 砲丁：出土が少ないため傾向が把みにくいが、住居址中央にあるものと、周辺壁際にあるものに分けられる。出土した同じ住居址内の遺物の分布状況と一致している。

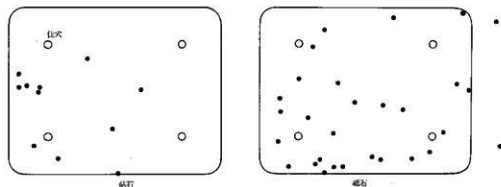
敲 石：出土が少ないが、大体西側に集まる傾向にある。

砧 石：全体に西半分南寄りに集まっている。特に埋燵炉のすぐ近くに位置するものが目を引く。24住の砧石は炉辺石に転用され埋め込まれていたが、6住・17住・59住の砧石はいずれも床直上から出土し、埋燵炉の近くの床上に置かれたまま遺棄されたと考えてよいであろう。

（第149図）

（3）小 結

比較的遺存状態の良かった住居址を選んだのであるが、まず遺物の出土量が極端に少ない住居址と多いものが見られる。この中で土器片は住居址南西寄りにその集中が認められ、比較的遺物の豊富な住居では壁際に稀薄になる傾向があった。そして石器の分布も、大部分はこれと



第149図 砧石と砥石の住居址内分布模式図

同じ状況であった。これと異なるものとして、磨製石斧は東側に集中し、出土した同じ住居址内の他の遺物の分布の傾向とややその分布を異にしている。砥石は炉周辺に集まることが挙げられる。土器は内区、外区という区別よりも、曖昧ながらも炉の周辺に集まるものと、炉の反対側に集まるものとを分け得た。その両者の土器組成は明確に分けられなかった。

なお、ここで得られた傾向を踏まえ、住居構造および場の設定との係りについては「住居の復原」の項でまとめて述べた。

4. 住居の復原

弥生時代の住居は「4個の支柱穴を持つものは、立てた柱の頂部に方形の桁を組み、妻に椀首をかけて棟木をうけて、垂木をおろす仕組⁽⁴⁾とされ、「外觀は入母屋的な家屋になる」といわれている。他地域では比較的4本の支柱穴と炉、そして貯蔵穴とされる壁際のビットが検出されるだけという、柱穴の少ない住居が多いようであるが、橋原ではそのような単純な住居はむしろ例外的であり、多くは大・小の柱穴が多数存在する。この柱穴と床面の分析では、空間区分に明確な斉一性を見出すことはできなかったが、本来的に竪穴内は一つの空間であって、住居空間の分割はないと見るが一般的である。ただし大形住居においては、ここでは「間柱」を介して空間の分割をしていることが判った。原則として入口の左・右に分けられ、それぞれの空間は、作業場と炊事場(勝手)とに使い分けられている。

竪穴内遺物の分布は、土器類が炉の周辺もしくはその反対側に集中する傾向があり、石器類も例えば打製石斧は南西側に、磨製石斧は東側に、砥石が南側に集中するなど、中央の出土は少なく、いずれかの場に片寄る傾向が読み取れる。砥石ははっきり炉のそばにあり、炉の一角が炊事場だけではなく、作業の場でもあることを示している。

農耕社会では収穫・調整作業に屋内は絶対に欠かせない作業場であるはずである。特に雨の多い日本ではその必要性が高かったと言われている。土間がすべての作業に順次、利用されていったのであろうが、作業の内容によって、中央の間柱を境にある程度の決められた場があったのかもしれない。砥石や紡錘車が南側に多いという指摘は、これらがより戸口に近い場所にあるということであり、屋外に使われる道具は入口付近の土間におくという、現在にも残る慣習と見てとれる。南壁近くに多い完形の大型打製石斧も同じに考えられる。

土器が炉の反対側に集まる点については、その組成に明確なものがでていないのでどういふことか明言はできない。ただ59住例に代表されるように、コーナーには屋内に収穫物を置く倉庫としての場(収納スペース)が設けられていた住居があり、これに関連するものと思われる。これらは中形住居であり、土間に対し、棚・高床の施設を想定できるが、中央に特に堅い土間のある住居は、コーナーに収納スペースが考えられる。

中央に堅い床のない住居は、そこに高床、あるいはベッド状遺構、土座といった、土間が踏みしめられないようになっていたことは容易に想像できるが、ではそれがどういふ場であったのか、62住のような住居は、特殊な「女の家」としても、33住に見られる柱穴の多数が集中す

る住居はどう理解してよいか、今のところ結論を見出すことができない。

戸口は南側に向けた長辺の側にあり、中央より、西または東のいずれかに寄るが、これには炉の反対側空間、つまり作業の場に直結する位置という規制——慣習というべきものがあつたと思われる。戸口は、他遺跡では短辺側の炉に相対する位置が多いようであり、やや情況を異にする。この理由は、住居の形が細長いということと、重要な点は立地条件にあると思われる。橋原集落は北向きの斜面に展開し、かつ南に山を抱いて、天竜川を背にするのである。冬の北風と、台風シーズンの川風（西→東）から家をまもる手段として、東西に長い、南に戸口の開く住居形態になったと思われる。戸口には必ずといってよほどに壁際にピットがある。貯蔵穴をここに考えるのはいささか不合理であり、戸口のそばのピットはそれに関連したものとすべきである。貯蔵穴は入口とはなれた位置にある壁際ピットであろう。

最後に上屋構造について、そもそもこれをぬきにして場の設定について語ることに無理があることは承知で分析を進めてきた。特に中央にある柱は、間柱も含めどういう柱か床を見ていただだけでは解決されない。先に、短軸方向に並ぶ柱穴列は、場を区分する間柱と理解し、それからそうではない1～3本の柱も同様の意味に捉えられないかと推察を加えた。これが本当に柱であったなら宙に立っているわけではなく、上は必ず上部構造のどこかに結びつけられなくてはならない。とすると、次の二通りが考えられる。(1)棟の短い寄棟形式の本体（上にころびの強い切妻の屋根がのる）の棟を支える。(2)中二階のような上部構造の重みを支える。この場合、4本の掘立柱では切妻にせよ、入母屋にせよ中央に柱はなくても差しつかえないので、上屋の骨組構造からは除外して考えねばなるまい。これについては、古墳時代の家屋の絵から想像される竪穴住居⁵⁾の構造から推察したが、切妻の屋根をのせる時に棟を支える柱は中央の土間に足を下して支える必要はない。束を桁に立てればよいのである。したがって、わざわざ土間の中央に柱を立てなければならない理由はない。

以下、これは推測になるが、四柱に梁をわたして（この頃はおそらくほぞ穴を穿てて組むと思われる）、そこを板敷の床として土間上の空間を利用するための手段と考えられはしないか。中二階構造である。切妻ではないとすると、中心がすばまり、この空間はそれほど広いものとはならないが、寝所あるいは倉庫としてのスペースはとれるはずである。3本以上の中央柱穴列は、柱を並べて天井を支えたと理解したい。

この時、炉の煙が立ちこめて、二階を煙が通りぬけてはこまるが、その点は炉の項でのべたように、煙出しの窓が設けられていた可能性があり、それほど問題にしなくてもよいのではないだろうか。60住の場合、入口に対峙する柱穴を裏口かと推察したが、堅い床の周囲が途中までのびて止まっている点是不自然であり、これは中二階に上る梯子を想定したいが、どうだろうか。上屋の構造については、これ以上、現場の検証には限界があることはいうまでもなく可能性を提起するにとどめておきたい。

5. 集 落

(1) 集落の位置と範囲

弥生時代住居址58棟の分布は、東端の49住から西端の57住まで、およそ200mの細長い範囲に、一見、東西の二群に分れて散在する。集落を論ずるには、集落の全範囲、あるいは一つの区切りとなる遺構の範囲内が発掘されていなくてはなるまいが、当遺跡では、国鉄用地内という限られた範囲内であるため、橋原遺跡の全容を知るには、あまりにも狭い部分であることをまず第一に明記しなければならない。それでは、集落の一単位としてはどうかとなると、西群の南（山側）は確認調査において、旧国鉄線路南からは遺物が全く発見されないなど、ほぼ限界と見なされ、北（天竜川側）は溝が発見されているので、溝の西方部に集落が続くことが予想される。もちろん溝が集落の限界を示すわけではないが、集落構成上の一つの単位を画するであろうことは予想される。これに対し東群は東側はほぼ限界にあり、15・24住北は天竜川に近く、確認調査でも遺構は見つかっていないが、それから川下の天竜川との間は、どれほどに集落が存在するか全く予想もつかない。また山側も同様である。東群と西群の中間の一带は表土下の礫層の在り方から見て、これ以上の住居は存在しなかったと確信している。このように西群はある程度集落の様相を把握できたが、東群は集落の一部を把握したに過ぎないのである。

住居と現天竜川との距離は、最も近い24住が37m、最高所にある10住が126mである。太古も今も岸辺の位置が変わりがなかったと思われるので、集落は河岸より一段高い微高地上に細長く展開するのであろう。

(2) 住居の分布

川側にどの程度集落がのびるか、おそらく地形なりに、弧状に河岸まで集落が展開する可能性は充分にあり、二分されないと考えるが自然であろう。しかし、住居址概括の項で述べたごとく、東・西、各群は極めて対照的である。(1)小形住居は西群に多い。(2)大形住居は東群だけにある。(3)南北方向に長い住居が東群に多い。(4)重複する住居が圧倒的に東群に多い。(5)炉を両側に2基持つ住居が東群に多い。などである。

住居の性格 住居構造の分析の中で、いくつかの住居個々に見られる形態の差を抽出できた。いわば住居の個性であるが、住居の分布を見る前に、柱穴の配置・大きさ・床の状態等の個性の中で、住居空間の場の設定に明らかな相違を示している土間（堅い床）の位置を主に、以下五つの住居を、大きな性格の差と捉えておきたい。

- A. 土間が竪穴全体に大きな位置を占める住居
- B. 竪穴中央に土間がない住居
- C. 竪穴コーナーに土間がない住居
- D. 竪穴に土間がない住居

補足しておくが、Aはすなわち広い作業場を持つと思われ、Bは中央に高床・土座の施設があり屋内作業のできない住居、つまり特殊な家である。Cは住居内に小さな収納スペースを持つ住居であり、Dは床全体が土座になっているか、またはあまり使われない産小屋のような住居

と考えた。いささか荒唐無稽な決めつけをしたが、AとCについては必ずしも全体住居址の精査ができたわけではなく、確実に区分はできない。この点、あくまでも一つの試みとして、時期別分布を追ってみた(第19表)。

ところで、3棟の際立って大規模な大形住居であるが、住居構造の性格からは特別な存在とはいえないので特に区分はしなかった。他との違いは偏に面積が大きい、あるいは極端に細長いという大きさの違いだけであり、出土した遺物も特殊なものはない。指摘できることとしては、ガラス小玉を出土した58住が住居構造の上では住居空間を二分する住居という点において大形住居と共通することは意味があるかもしれない。これに関連して、I・II期では大形住居の6住とこの58住は南北に長い住居であり、東西を主体とする中でI～III期2棟の南北方向の住居は何か意味を持っていることも考えられる。

時期別分布——集落の変遷 各住居の時期は、重複する住居が少なく、それも点在する状態であり、基本的には重複する住居を基にしたが、大部分は土器の分類・編年から四期に区分された。各期の時期別分布は図示したとおりである(第150図)。

第I期 従来より指摘されている3棟1グループの図式が⁽⁷⁾ここでもいえそうである。分布の上では、西から64-67-11住、22-70-68住、59-55-7住、?-21-19住、28-4-15住、?-6-?住である。?はまだ東群は住居址の発見される可能性があるためである。大形住居に特別の分布状態は見られないが、小グループでは6住と4住は別グループになる。これは北限から3棟づつ括った結果である。

調査地区に見られている住居だけで16基、同一期での切り合いはないが、すべて同時期に共存したとは思われない。しかし、これらを細分する根拠はなにもない。

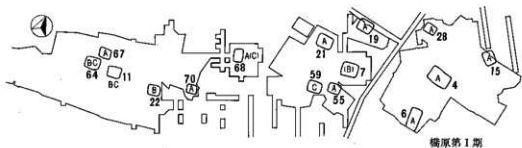
全体には、中央部に堅い床のない住居が西群に集中し、東群には7住と59住を除いて土間の広い住居ばかりである。西群と東群の一部の小グループ内にはA・B・Cの住居が組み合わされる傾向にある。

第II期 3棟1グループの把握は、I期のようにきれいにまとまらない。東群は引き続き土間の広い住居ばかりであり、東と北に偏在する。西群はA・B・Cの住居が組み合わさるが、西群のこの5棟は1グループではないだろうか。

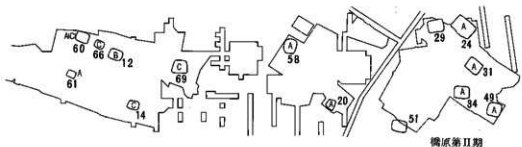
第III期 西群はやや性格不明が目立ってはっきりしない。中間地帯に1棟も見られないのはどういふことか。東群は32住を除いて、すべて土間の広い住居である。

第IV期 最も構成数が少ない。西群・東群に3棟であるが、すべて山側に寄っており、西群の3棟は集落のはずれにあたる。住居は土間のない住居ばかりであり、集落構成は特異な在り方を示している。

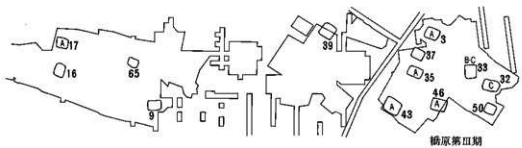
住居の変遷 I～IV期を通して、それぞれに個性を持った住居はどう変遷していくであろうか。住居の形や向きは変化がなく、炉の位置、入口の位置も変化は見られないが、内区中央の柱穴はIII期から減っていく傾向があり、IV期では1棟だけになる。土師期の住居には中央の柱穴はほとんど見られないが、この点でははっきり、次の時代に移行していく姿が現われている。



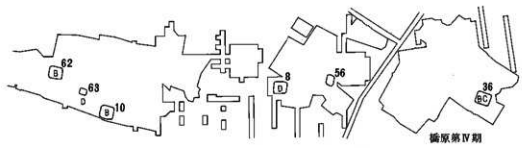
橋原第Ⅰ期



橋原第Ⅱ期



橋原第Ⅲ期



橋原第Ⅳ期

第150図 橋原遺跡集落変遷図 (1/1600)

土間の広い住居は、各期を通して主体的にあり、Ⅲ期は中央に土間のない住居はなくなる。それがⅣ期はすべて土間のない住居になることは、いささか理解に苦しむ。あるいは西群にこのような住居の分布が集中するので、北側の溝を境にして、特殊な住居が集落の一角を占有していた結果なのであろうか。

大形住居はⅡ期で消えてしまうが、性格的にはⅢ期まで残る(35住)。大形住居を中心とする集落東端の一群は、作業場を広く屋内に持つ住居群であり、Ⅰ期、Ⅱ期では3棟グループという把握より、住居の性格により、集落内の占有地を別にして見ると見る方がよいのではないだろうか。東群に「生産の主体者」、西群に「祭政の主体者」を中心に住み分けがされていたのであろう。屋外の共同炊事場と推察された焼き石炉が東群にあり、この一角は生産活動を中心とする「生活の場」であったと思われる。

第Ⅰ期に最大の構成数を誇る橋原の集落は漸次小規模化していく傾向があり、それにつれて住居も小形化していくようである。こうした現象はやはり各地の集落変遷の中で指摘されているが、弥生から土師へ、橋原の集落も何らかの影響を受け、集落も変容して行ったのであろう。

調査では水田址や墓域が検出されず、集落構成を知るところまではいかなかった。単に住居址の分布を示すにとどまるが、中部山岳地の弥生時代集落の研究に資することができれば幸いである。調査地区の周辺にはこの集落の続きがまだまだ埋蔵されているはずである。今後の調査の参考になることを期してまとめたい。

註・参考文献

- (1) 石野博信「考古学からみた日本古代の住居」日本古代文化の探究「家」社会思想社 1975
- (2) 末木健他「山梨県中巨摩郡敷島町金の尾遺跡発掘調査中間報告」長野県考古学会誌 33号 1979
- (3) 御堂島正「住居址」、「高松原」(本文編 伊那谷弥生後期集落の研究)高松原遺跡調査団 1977
- (4) 和島誠一・田中義昭「住居と集落」日本の考古学Ⅲ「弥生時代」河出書房 1966
- (5) 平井聖「日本住宅の歴史」日本放送出版協会 1974
- (6) 小久保徹「弥生時代の大型住居について」埼玉考古17号 1977
- (7) 戸沢充則「海戸遺跡における集落(住居址群)の構成」『海戸』岡谷市教育委員会 1968
- (8) 宮沢恒之「弥生研究のめざしたもの」『高松原』(本文編) 註(3)に同じ
- (9) 田中義昭「弥生期における耕地と集落」日本考古学を学ぶ(3) 有斐閣 1979
- (9) 大沢和夫他「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」昭和45～53年度 長野県教育委員会

第5節 橋原遺跡における古代以降の様相

橋原遺跡における平安時代以降の遺構・遺物は前述した通りである。遺構についてみれば、住居址9棟、堅穴状遺構2基、土壇1基が検出された。これは遺構が哪辺の時期に該当し、またその性格は何かを遺物を含めてここで少しく検討しておきたい。

住居址9棟中2棟、すなわち25・26住は、他の7棟とその出土遺物のあり方に相違点がみられる。この二つはカマドを有する住居址で、土師器の変形土器、小形変形土器B類、黒色土器、

灰釉陶器高台壇を伴出する共通点が認められる。特に灰釉陶器高台壇は破片ではあるが黒笹90号竈期に比定され、小形甕形土器B類の発見と共にその時期を制約する一資料となり得よう。

黒色土器は第一類・二類の両者がある。両面漆黒色を呈する第I類出土住居址は県下でも最少であり、しかも耳皿の出土は注目に値しよう。管見にのぼった県下の耳皿点数は15点、うち灰釉陶器10点、須恵器2点、土師器3点である。土師器耳皿3点の出土遺跡は、伊那市伊那福島遺跡、更埴市屋代大塚遺跡、更埴市八幡青木遺跡である。福島遺跡出土耳皿は手捏ね品であるが、他の2点は本品と同じ技法である。しかし、3点とも高台は付されていない。本遺跡出土品はロクロ成形後糸切調整をなし、貼高台をして皿部の両端をつまみ、その後両面に炭素吸着研磨をおこなっている。この点灰釉陶器耳皿をまわって作られたものと考えられ、県下でも特異なものである。耳皿は祭器として伊勢神宮等で現在も使用されており、祭祀的性格を26住に求めることができよう。

また、供膳形態用土器の大半が黒色土器第二類に属し、灰釉陶器も少なく須恵器が皆無であることは、漏水防止完備なる本品を上質の日常用器とした時期、あるいは使用階層を想定させるものである。さらに、第二類中に墨書土器1点があり、「可」字が墨書されていた事実は、この時期の県下住居址では普遍なことである。

以上からみて、25・26住は平安時代中期後半、換言すれば筆者編年になる平安時代第Ⅲ期前半末、11世紀前半に住置づけられよう。

次に他の7棟の住居址について触れたい。38・45・53住はカマドを有し、18住は地床炉も一つ。23・27・52住はカマドも地床炉もなく、焼土の存在が知られるのみである。耕作による破壊擾乱があるとはいえ、仮にカマドを構築すれば、何らかの形で残骸が認められるはずである。それとともなく、単に焼土がみられるのは、最初からカマドはなかったものと考えべきである。さすれば、カマドのない住居址内の火処では、鉄輪（五徳）、ヘツツイ（移動可能の陶製カマドなど）あるいは枝分れした木の鉤等々を使用したものと推測されるのである。鎌倉時代の絵巻物等にみられる厨房図は、これを示唆するものである。

また、7棟に共通する遺物として、土師質の小形環形土器がある。中世ではカワラケと称し、その初見は平安時代中期中葉で、後期後半から本格的に量産化されはじめる。これは遺物編で前述したように器高指数から三大別される。I類は25以上で器内が厚く、やや深い坏部を有するもの、Ⅲ類は20以下で坏部が浅く、しかも内耳土器と伴出する場合が多いもの、Ⅱ類はこの中間である。I類は筆者編年の平安時代第Ⅳ期後半に位置づくものであり、Ⅲ類は内耳土器の伴出を考慮してその盛行は中世以降におかれよう。破片等をも含め住居址別にみると、I類該当住居は38・45・53住、Ⅲ類の多いのは23・27住である。

カワラケと共に注目された土器に小形高台環形土器がある。器高指数は41と大きく、高台もいわゆる貼高台や削り高台ではなく、底部器肉を1~2cm厚くし、高台を簡略化したものである。18・27・38・53住からの出土品であるが、内耳土器を伴出したものもあり注意される。目下のところこの種の出土例はなく、この時期のみのものか、あるいはこの遺跡特有のものか、

類例をまって今後検討しなければならぬ。

中世に位置づけられる内耳土器は、23・27住から出土し、27住のそれには底部に糸切痕を残すものもある。おそらくは、ロクロを用いて量産化しはじめたものと推定される。また、深手の内耳土器であることはこの種のものでは古式に属するものである。さらに23号住伴出の灰釉瓶は頸部幅が広く、素地の粗悪化、ロクロ技術の低下等々を考慮すれば、いわゆる白瓷系陶器の範疇に入るものであり、これまた時代を下げる必要があろう。

さて、かくの如く7棟の住居址は、火処の様相、遺物のあり方からみて、平安時代末期から中世初頭にかけて存在したものと想定したのである。中でも、カマドを構築していた38・45・53住群が一番古く、次いで18・52住が続き、最後に内耳土器、中世陶器を伴出する23・27住と三区分でできそうである。

かつて、筆者は平安時代土師器等の編年試論において、最終期の第V期を灰釉陶器の調査に伴ない、中世陶器の原流をなす各地方産の製品が出現しはじめる時期と考えたことがある。その際、土師器はカワラケとも言うべき小形坏が多量に出まわるとを示唆したのであるが、その資料を本遺跡で補うことができた。その意味で今回の調査は、平安末から中世初頭の研究に寄与するところ大であったと言えよう。

住居址以外の遺構中、竪穴状遺構2基は、その竪穴形態および出土遺物よりみて、最近とみに類例を増しつつある中世遺構であることは論をまたない。壁が緩傾斜でしかも堅い床面をも兼ねている例は、飯田市伊賀良酒屋前遺跡、小垣外遺跡、下伊那郡松川町的場遺跡、諏訪市大熊道上遺跡等々、県下で50例以上見受けられる。しかも、その出土遺物は本遺跡同様少なく、中世のいつ頃に比定すべきかは困難な状況にある。また、1号竪穴状遺構からは粘土や3点の砥石が発見され、その集石状況からみて工房址の存在が予想されよう。

33号土壇は遺構の状態、出土遺物から江戸時代の土壇墓である。

最後に包含層出土遺物中に平安時代の土鏝17点がみられた。これは天竜川流域に立地する本遺跡も、諏訪湖沿岸同様に漁業が早くから隆盛していたことを物語るものと言えよう。

参考文献

伊藤彰爾「中世住居史」(1968年)。

桐原健「釜から鍋へ」(『信濃』25の11、昭和48年11月)。

大林太良編「日本古代文化の探究 火」(昭和49年12月)。

拙稿「信濃の墨書・刻書土器」(『中部高地の考古学』1978年4月)。

桐原健「宋銭出土の竪穴住居址」(『伊那路』21の7、昭和52年7月)。

拙稿「平安時代土師器等の編年試論」(『信濃』29の9、昭和52年9月)。

栄久庵憲司「台所道具の歴史」(1976年2月)。

第VI章 橋原遺跡における植物遺体からみた 古代の農耕について

1. 出土の概要

橋原遺跡の考古学的な意義の一つに、多量の植物遺体の出土があげられる。出土層が厚く、弥生から平安、中世の各時代に種々の植物遺体が検出されている。

特に炭化米粒の出土が多く、約40の住居址の大部分から確認されている。米粒についてヒエ、アワ、エゴマ、アサなどの雑穀類もかなり多数出土している。また一部の住居址に小数ではあるが麦や豆類も混在している。また、野生植物の遺体としてはクリ、クルミを始めサクラ属やブドウ属などの堅果類を中心とした木の実もかなり出土している。

53号住居址（平安～中世）からはクリ、クルミを除くほとんどの種類のものが出土しており最も多様であった。炭化米粒は59号住居址（弥生後期Ⅰ）から約35万粒（100粒重からの推定値）出土しており、過去における同時代の炭化米粒の出土例としては他に類をみないものと思われ、貴重な考古資料といえよう。平安時代から中世と推定される18号住居址からも1600粒余の炭化米粒が出土しており、粒型などの測定によって、当時の米品種の実態を推察することができ、これも重要な資料である。

以上のような出土植物遺体の種類や量から古代の農耕あるいは食生活の一端を知ることが出来るのみでなく、炭化米粒の計測により稲品種の時代的な変遷をも推察することが可能であり、考古学の分野では勿論、広く農学の領域においても重要な意義を持つものと考えられる。

2. 住居址別出土量

第16表に住居址別にみた各種類の出土量を示しておいた。各住居址の出土量は住居放棄時の状況あるいは現在に至る間の保存状態などによって異なり、量的な見知からのみ当時の農耕や食生活の様相を直接推測することには問題があるが、ある程度の裏付けとなろう。

また、59号住居址については多量の炭化米粒や雑穀類が出土したが、木炭や不完全燃焼の木片が混在していることから、火災により食物が保存状態で埋没されたものと推定され、特殊な事例である。

3. 時代別出土傾向

弥生時代後期から中世までを時期別に区切って食物遺体の出土傾向をみたのが第151図である。出土量（個数）は絶対値が異なるので単位は統一できないが、傾向を読み取ることは可能であろう。

弥生の後期になるとすでに麦類、雑穀類、豆類や堅果類とすべての種類が出土しており、時

代とともに多様化していることがわかる。

また、すべての時代において、米粒が相対的に多いことは、時代の変遷があったとしても、米が非常に重要な食糧として扱われていたことを物語っており、橋原遺跡の一つの特徴である。

4. 炭化植物遺体の記録と種類の同定

炭化植物遺体の記録は、主要なものについては附図に掲げた様に、まず拡大スケッチ（実体顕微鏡による）によって表面の特徴や破損状況を精確に記録すると同時に種類や状態（例えば稈と玄米の区別）の同定のための資料とした（第159・160図）。また、写真撮影により上記と同様の目的で記録した。いずれの場合も可能なものについては現世の同種類の実物を比較のために記録しておいた（写真100～102）。

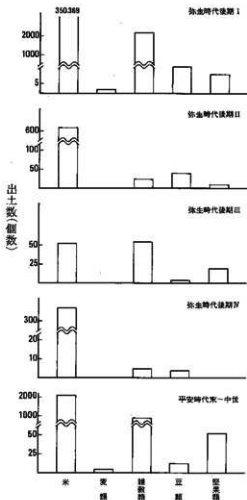
種類の同定に際しては、種子の大きさおよび形状からおおよその見当をつけ、更に種皮の部分の構造、例えば溝や切れ込みの位置、形などの類似性を中心に、また、豆類では胚の部分の位置関係を指標として類別、同定を行った。

これらの方法によって分別が困難な場合は次に述べる走査型電子顕微鏡によって表面構造を現世のものと比較した。

最近、植物の種子の表面構造の詳細な解析によって系統分類の新知見を得る試みが進められている。このような場合に光学的には検出することが出来ない表面突起などの微細構造については、走査型電子顕微鏡がしばしば応用されるようになった（笠原安夫：走査電子顕微鏡で見た雑草種実の造形 1976）。

本調査においても、炭化種子類の表面の特徴が光学的に十分把握出来ない場合に走査電顕が有効に利用出来るかどうかの問題も含めて、主要な出土種子類の表面走査を実施した。

使用した電子顕微鏡は信州大学農学部植物病理学研究室に設置されている日本電子 JSM-35型であり、同研究室の田端信一郎助教授の御指導を得て短時日の期間に写真撮影することが出来た。厚く御礼申し上げます。



第151図 炭化種子・堅果類の時代別出土傾向

附図に示すようにそれぞれの種類別に、出土炭化種子および同類と推定された現世のものを対比して配列した。写真から明らかなように炭化米粒のように表面構造あるいは胚の位置などが明確に確認できるもの、また、麻やエゴマのように表面の特徴が現世の同類とよく似ているものなど、いくつかについては電子顕微鏡による走査によって同定が確められたものもある。しかし、炭化と云う特殊な状態なので表面の構造の軟弱なものあるいは特徴のはっきりしないものについてはかなり困難に思われる。いずれにしても、走査型電子顕微鏡による種類の同定に際しては表面が完全に保存され、原型を保っている遺体については十分な能力を発揮するものと思われる（写真103-109）。

5. 出土炭化米粒の形態および粒型の変異

(1) 住居址および時代別出土炭化米粒の比較

弥生時代の後期から平安時代～中世に至る間を主として出土土器による編年の結果、前章のごとく橋原遺跡の集落は弥生後期Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳおよび平安中頃、平安末～中世の6段階の時期に区分された。炭化米粒は、これらの各時期のうち平安中頃を除いたすべての時期の住居址から出土している。

出土住居址数は全体の約56%に当たる38棟で、最も多いのは弥生時代後期のⅠ段階の13棟であり、次いで同時代のⅡ段階の10、Ⅲ段階の9となっており、Ⅳ期および平安時代～中世はそれぞれ2棟で最も少ない。

また、出土粒数についてみると、弥生後期のⅠ段階が圧倒的に多く35万余粒で、次いで平安末～中世の2018粒、弥生後期Ⅱ段階の617粒、同Ⅳ期が371粒、Ⅲ期56粒となっている。

弥生時代の出土古代米についてはこれまでに多くの研究報告がある。佐賀県の夜臼および板付式土層を始め、関東地方に至る各地で発掘された土器の糠圧痕あるいは炭化状の米粒の計測の結果から稲の日本への導入、さらには日本国内における伝播の経路が推定されている。

本遺跡から出土した各時代の炭化米についても粒の大小あるいは粒型を測定し、これまでの同時代の他遺跡の結果を対比させることにより、弥生から中世の稲の系譜、ひいては稲作農耕技術の一端を推察してみた。

測定は出土量が100粒以上のものについて実施し、万能投影装置にて拡大し、粒の長さとお巾を任意の100粒について行ったが59号址については1000粒を計測した。

測定に供した米粒の出土した住居址は第21表に示したように弥生後期Ⅰから平安末～中世の6住居である。また、長野市の平楽平遺跡から最近弥生時代の炭化米粒が出土しており、その一部を同調査団の厚意で提供していただき参考資料とした。

なお、同遺跡の炭化米粒は日本の古代米についての権威者である佐藤敏也先生に上記調査団からすでに鑑定計測を依頼し、結果が同調査団に報告されていることを付記しておく。

さらに、現代米との比較のために長野県の主要品種であるシナノコガネを供試した。

第20表は炭化米の形態を比較したものであるが、粒については、53・18号住居址（平安末～

第20表 出土炭化米粒の形態比較

住居址他	粒数	粒重(μ)	粒長(mm)				粒幅(mm)				長幅比				長幅積			
			最大	最小	平均	変動係数	最大	最小	平均	変動係数	最大	最小	平均	変動係数	最大	最小	平均	変動係数
59 号住居址	1000		5.6	3.4	4.58	6.51	3.5	1.9	2.72	9.52	2.40	1.33	1.70	8.33	18.68	7.35	12.50	14.03
64 "	100	0.66	5.4	3.0	4.45	8.26	3.2	1.9	2.65	10.87	2.25	1.25	1.70	10.39	16.70	7.20	11.82	16.24
58 "	100		5.2	3.7	4.53	7.02	3.2	1.9	2.59	9.61	2.23	1.41	1.76	10.00	15.08	7.41	11.78	13.58
10 "	100		5.3	3.7	4.38	7.40	3.2	1.8	2.54	11.41	2.12	1.44	1.73	8.75	15.37	7.60	11.20	16.99
53 "	100	0.68	5.2	3.4	4.31	8.17	3.1	2.1	2.66	8.47	2.00	1.32	1.63	9.11	15.08	7.82	11.50	14.24
18 "	100		4.9	3.3	4.20	7.34	3.6	1.9	2.54	9.80	2.14	1.17	1.67	10.74	15.12	7.00	10.67	13.60
平 柴 平	100	0.82	4.9	3.7	4.41	5.22	3.5	2.4	3.04	8.95	2.04	1.26	1.46	9.43	16.66	10.00	13.39	11.53
シナノコガネ	100	2.04	5.7	4.5	5.52	4.53	3.1	2.5	2.80	4.23	2.19	1.61	1.87	5.87	16.53	12.15	14.63	6.50

*……(%)

中世)が弥生時代のものにくらべ若干短い、粒幅には一定の傾向が認められなかった。長さ
と幅の比については弥生時代の平均1.72に対し、平安末~中世は1.65と小さい値を示した。こ
の長・幅の比は、古代米の分類に一般的に用いられている計測値であり、この結果は、北九州
の板付遺跡出土の9例の平均値1.74とほぼ一致しており、夜臼、板付I式(佐藤敏也)と同類
とみなすことが出来、奈良時代以降に導入された長・幅比2.0を示す長粒米(秣)は含まれて
いない。

各住居址別の粒型の変異をみるために変動係数(標準偏差/平均値×100)を算出したところ
長さ・幅および長・幅の比いずれも平安時代以降のものが若干小さい傾向を示したが大差はな
かった。

また、長野市平柴平出土の米粒は橋原のいずれの時代のものともかなり異なり、著しく短粒
で、その比は1.46であった。

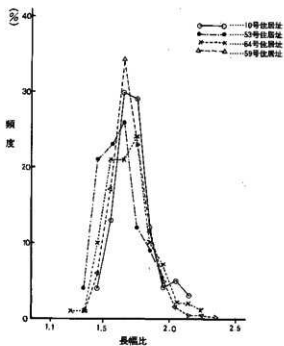
現代品種のシナノコガネは1.87であり、橋原より細長い粒型をしている。

このような長・幅比について各住居址別に分布状態を比較したのが第21表である。

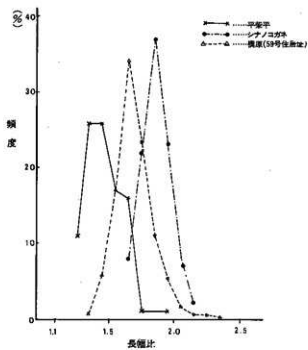
この表から比が2.0を越えるものが若干含まれているが、炭化状でもあり、長期間の埋没ある
いは取り出し後の扱いによって摩滅したことも考えられ、秣の混入との断定は出来ない。

第152図および第153図は長・幅比の分布状況を住居址あるいは他地域出土米、現代品種など
と比較したものである。

次に、粒の長さや幅の相関関係について解析を試みたが、このことは相関図あるいは相関係
数などから、当時の米粒の変異状態を把握することが出来、ひいてはある時代の稲の生理・生
態的な変異の様相をも推し計ることが可能と考えたからである。つまり、現代品種は遺伝的に
純系であり、長・幅の相関は殆んど認められなく、また、早晩性や稈長などもほぼ一定してい
ることから、変異の幅や相関係数が大きい場合はいろいろな遺伝型をもつ個体の混系集団とみ
なすことが出来よう。



第152図 住居址別米粒の長幅比



第153図 出土炭化米と現代品種(シナノコガネ)の長幅比の比較

第21表 出土炭化米の粒型の変異

住居址・他	時 代	長 幅 比												粒数	平均	変動係数	
		~1.2~1.3~1.4~1.5~1.6~1.7~1.8~1.9~2.0~2.1~2.2~2.3~2.4~															
59	弥生(後I)			7	59	172	341	231	114	52	14	4	4	2	1000	1.70	8.33*
64	" "	1	1	10	21	21	24	10	7	2	2	1		100	1.70	10.39	
58	" (後II)			8	11	20	22	17	14	5	2	1		100	1.76	10.00	
10	" (後IV)			4	13	30	29	12	4	5	3			100	1.73	8.75	
53	平安米~中世			4	21	23	26	12	9	5				100	1.63	9.11	
18	" "	1	3	13	24	22	18	7	8	3	1		100	1.67	10.74		
平 柴 平		13	26	26	17	16	1		1				100	1.46	9.43		
シナノコガネ					8	22	37	23	8	2			100	1.87	5.87		

*.....(%)

第22表 出土炭化米粒における長・幅相関の時代別比較

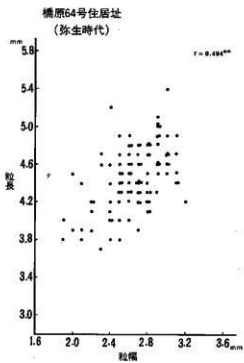
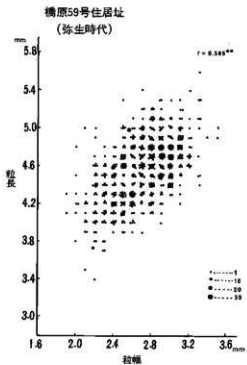
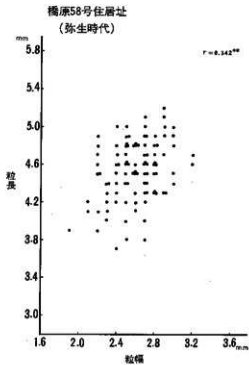
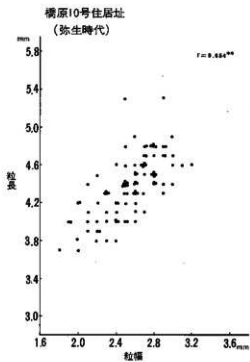
時 代	段 階	住居址番号	長・幅相関係数(r)
弥生(後期)	I	59	0.565**
"	I	64	0.494**
"	II	58	0.342**
"	IV	10	0.684**
平安米~中世	I	53	0.453**
平安米~中世	II	18	0.242*
平柴平出土米			0.266**
現代米(シナノコガネ)			0.099

*.....5%水準で有意
*...1% "

第154・155図に、各住居址及び現代品種の相関図を示した。これらの図から明らかなように弥生時代の米粒はいずれも長・幅の相関係数はかなり高い値を示しているのに対し中世とみられる18号址では $r=0.242$ と低くなっている。現代品種はさらに低く $r=0.009$ で全く関係は認められない。時代、住居址別に相関係数を示したのが第22表である。

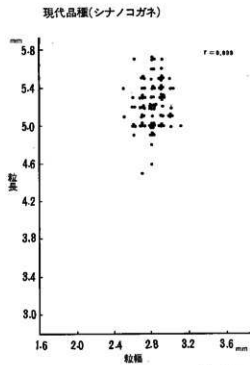
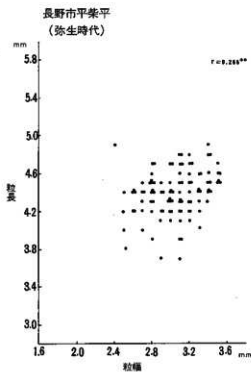
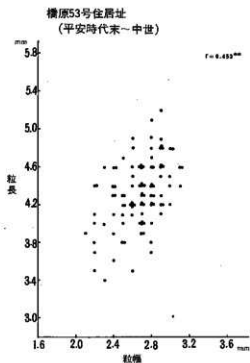
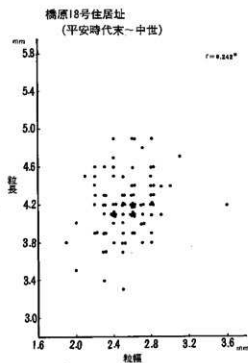
また、上記の関係を模式的に図化して時代別に比較したのが第156図及び第157図である。弥生後期I及び平安と中世の同時代の出土米の長幅の分布はいずれも類似した型をしていることがわかる。

平柴平出土米と現代米を含めて総合的に比較したのが第158図であり、時代の変遷とともに分布の型が変化することが認められる。上述したように長野の粒型は橋原とはかなり異っており、相関係数も高いことが明らかであり、このことは同一時代の地域による稲の系譜の違いを示すものであり、当時の居住者の移動や交流を推察する重要な手がかりとなるもので、大変興味深い。



第154図 出土炭化米粒の長・幅の相関関係

**1%水準で有意



第155図 出土炭化米粒および現代品種の長・幅の相関関係

*5%水準で有意
**1%水準で有意

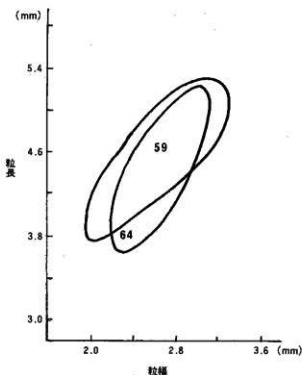
(2) 南信地方における弥生時代以降の農耕文化の源流と変遷

以上出土炭化米粒の形態や変異について述べたが、前項の出土植物遺体の様相をも包含して、橋原遺跡に代表される南信地方における弥生時代以降の農耕文化の源流と変遷の一端についてふれてみたい。

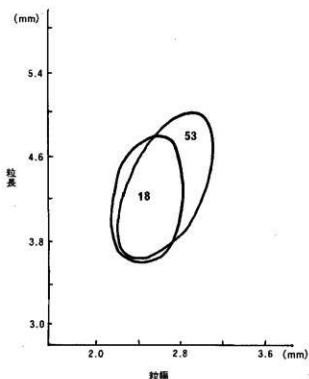
当遺跡は天竜川の流域の小段丘上に位置しており、近辺には小河川も存在し、水利の便のよい場所である。

弥生時代の後期にはすでに米食が導入され、食生活の中で最も重要な役割りを果していたことは明らかであり、同時に雑穀類も相当出土していることから、当然畑作も営まれていたとみなしてよい。炭化米粒が各時代から多数出土しているものの、稲作農耕が成立していたかどうかについての確証はない。

周辺が住居地区で、未発掘部分が多いこともあり、水田跡は発見されておらず、水利の点から推定した土層の花粉分析は広島大学の安田喜憲先生に依頼しており目下結果を待っているところである。しかし、石廂丁も多数出土しており、刃の部分がかかなり摩滅していることから、穂苧りまたは穂首苧りが行われていたことは想定できる。水稲作か陸稲作かについての疑問も残されている。



第156図 弥生時代後期59・64号住居址における炭化米粒の長・幅の相関



第157図 平安時代末～中世18・53号住居址における
炭化米粒の長・幅の相関

平安末から中世にかけては水稲耕作は成立していたと考えるのは妥当であるが、若し弥生時代から稲作が営まれていたと仮定すると、当時の稲の生理、生態的な特徴あるいは品種は何時頃から成立したものであろうか。

前述した粒型の時代による変遷の結果から、いくつかの状況を推定してみよう。昨年は異常な冷夏であり、東北を始め信州の標高の高いところでの稲作は記録的な冷害を残した。

現代のような近代農業技術の時代であってもしばしば冷害は発生している。天竜川沿岸一帯は現在でも稲作りのむずかしいところであり、弥生時代には冷害は常発していたであろう。このような立地条件の中で稲作を考える場合、粒型から推定した混系集団、すなわち、早晩性、稈長あるいは草型などの異った稲を同一水田に栽培し、成熟期を迎えた個体から順次穂刈りを行ったものであろう。このような混系集団は夏の低温や長雨さらには早魃にとって危険を分散させるのに大変好都合であることは容易に理解できる。昨夏の冷害でも田植時期がわずかに違ってただけで回避できた例もある。

恐らく弥生時代全般を通じて上記のような種類の稲が栽培されていたものと推定される。そして、平安末期頃から徐々にではあるが意識的に同一形質をもった個体の区別が行われ、特に早・晩性について選抜が行われたことは粒型の長・幅の関係の時代的変遷からも推察される。

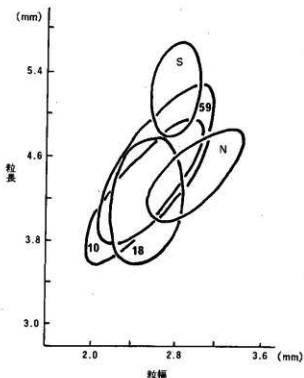
同時収穫は作業効率に直接関係し、また、好条件下では多収を上げることが可能である。万葉の時代には日本で最も古い品種の区別、すなわち、早稲(わせ)、晩稲(おしね)などが記録されている。

このような粒の長・幅の関係を調べることは考古学的な編年の資料にも適用することが可能であり、今後の詳細な検討により有効な手法となり得るものと思われる。

長野市の平柴平出土の炭化米粒は著しく短粒で、橋原とはかなり異なっており、しかも、長・幅の相関係数が高いことから、遺伝的にも雑ばくなものとも推測され、兩信地方と北信地方の稲作の承譜の

差異ひいては農耕形態の類似性を論ずる場合の貴重な資料となろう。今後さらに詳しい解析あるいは、これまでに出土した炭化米粒を中心に再度検討してみたい。

本調査・解析に当って、南晴文、小西眞理子の両氏には多大の協力を得たのでここに厚く御礼申し上げる。

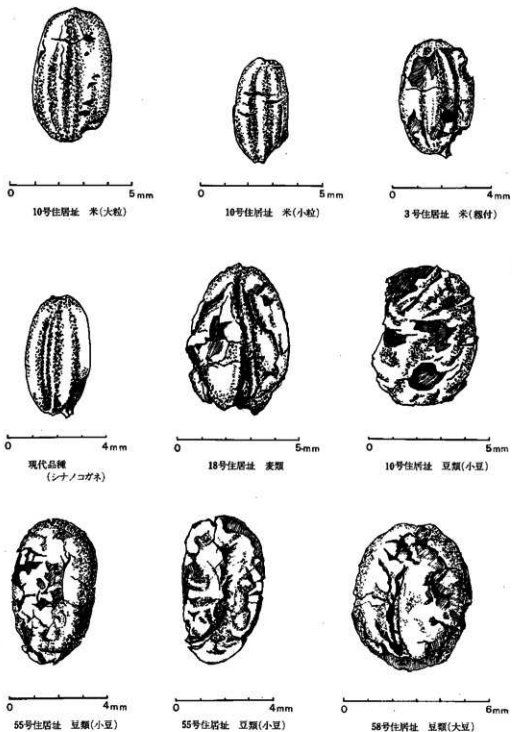


第158図 住居址別出土炭化米粒の長さとの関係
(数字は住居址番号、N—長野市平柴平、S—現代品種シナノコガネ)

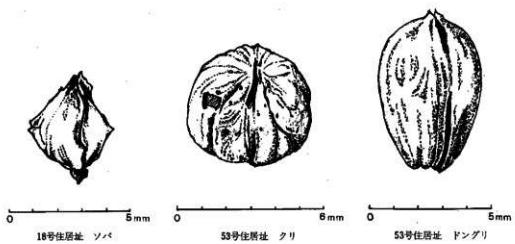
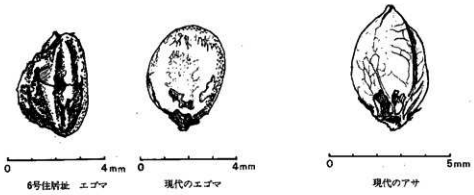
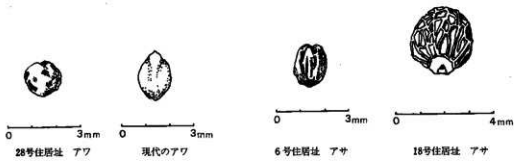
信州大学農学部 氏原 輝 男
川合 徹

参考文献

- (1) 柳田国男・安藤広太郎・盛永太郎 「稲の日本史」 昭和44年 筑摩書房
- (2) 佐藤敏也 「日本の古代米」 昭和55年 雄山閣
- (3) 神澤雄一 「稲作の時代」 日本人の先祖 昭和53年 毎日新聞
- (4) 大塚初重他 「日本考古学を学ぶ—2—」 昭和54年 有斐閣



第159图 出土植物遺体類実測図



第160図 出土植物遺体類実測図

結 語

橋原遺跡は弥生時代後期を中心に、ひきつづき土師期の奈良・平安時代、さらに中世～近世におよぶ痕跡もみられる遺跡であることが、この調査によってほぼ明らかになった。

遺跡の位置する橋原周辺は諏訪湖の排水口釜口から天竜川となる一帯で、天竜川の西岸には塩嶺山塊の山麓に三沢集落、東岸には守屋山麓に橋原集落がある。両山麓はわずかに開けた丘陵地帯があるのみで、大部分は河岸まで山がせまる谷地形であり、伊那谷から諏訪盆地に通ずる要衝にあたり、古来、先進文化の流入口であったとみることができる。釜口から数kmにおよぶ川岸地帯には縄文・弥生時代の遺跡があり、その近くには現在の集落が多く分布しており、橋原の如きはほとんど重複する形で集落を形成している。

この多数の遺跡のうち橋原遺跡と天竜川の対岸三沢の荒神塚遺跡、その近くにある鬼戸古窯址（埴輪、須恵器の窯）など、この橋原遺跡と関連なしに考えられぬものとみることができる。

まず、橋原遺跡の周辺には弥生時代の遺跡として、釜口に近く小尾口海戸、天王垣外の遺跡が先行している。天王垣外からは次の時代を予言するかとみられる362個の玉類の出土がある。これは諏訪地方への弥生文化が流入し、これが定着しやがて古墳時代への移行の過渡期を暗示するものとして注目されている。

天王垣外につづくともみられるのが今回発掘の橋原遺跡である。出土品をみるといくつかの特色をみることができる。まず炭化米の出土の多いこと、そして炭化米は橋原遺跡の後期の全期にわたり出土していること、このほか麦、ソバ等の雑穀類も出土があって、農耕生活が定着した大集落が形成されていたことを知ることができる。このように多量の炭化米の出土にもかかわらず、水田址の確認のできなかったことは、甚だ残念であるが、他の雑穀と同様に陸稲であったか、または天竜川を越えて対岸、あるいは釜口湖岸に耕地を求めてもさしたる不自然は感じない。米作りの他に出土品から注目されるのは小形手捏土器、紡錘車、砥石の多いことである。紡錘車は織物技術の発展、砥石類は金属用具の多かったことを語るものであり、一般生産技術の向上を知るのである。小形手捏土器は、東日本ではあまり例の少ないものであり、またこの地にまつわる古来の伝承とともに歴史時代との接触において最も興味ある問題を提起している。

弥生の後期につづく土師期への移行は、この橋原において相当に解明され、9棟にのぼる住居址を発掘した。（遺跡の一部の発掘であり、全体を知ることができなかった。おそらくもっと多くの住居址が存在したと思われる。）

弥生時代以降の展開を古墳との関連においてみるに、諏訪地方ではこの発生が赤石山脈の守屋山麓に集中し、上社近くにあるフネ古墳→片山古墳→狐塚古墳→糠塚古墳という編年が考えられている。湖北＝岡谷地方にある古墳は発生期につく第二期の古墳群であり、平地に立地するスクモ塚古墳がある。この古墳は釜口の小尾口海戸から天王垣外の時代を経て湖北一

帯は大いに開発が進み、定着した集落も形成され長地榎垣外等の大遺跡を基盤として発展したのであろう。ついで古墳も第三期となり、各地の開拓が進み、発生の集落も拡大し、一小集落を単位とする古墳圏が成立して築造されるのであるが、この期のものとして三沢荒神塚、若宮古墳をあげることができる。

橋原には古くから洩矢の神を祀る洩矢社があり、三沢荒神塚と関連のある伝承をのこしている。この伝承は諏訪地方の古代史を語るものとして興味あることであるので略記すると、諏訪地方の開拓は諏訪神社の祭神、建御名方命のご入来によって行われた。ところが諏訪にはそれ以前から洩矢神や武居恵比須神を祀る先住民があり、諏訪明神と対立した。その場所が三沢荒神塚と橋原洩矢社であると……、洩矢神は鉄輪を、明神は藤の枝を持って戦い、明神は邪輪を降して正法を興し、その藤はやがて根をはり枝葉は栄えた。というのである。

これは神話の一つであり、歴史的事実であるとは考えられないが、当時新しい文化を持った氏族が先住民と対立し、抗争もあり、融和もあって発展して来たことを語っている。おそらく、当時新文化の伝承がこんな形で流入したのであろう。

先にみた橋原の弥生時代をみるに、祭祀行事を暗示する小形手捏土器は、農耕祭事の祭器として使われ、ことに洩矢氏はのち明神への奉仕者となり神長官と称する祝部を形成している。洩矢氏は後世に至るも洩矢社を祖神として祀っている。

これは諏訪の古代を知る上に最も重要な課題の一つである。古来よりの伝承は単なる神話とすることなく、考古学的考察と合わせ、古代諏訪の究明のため、でき得るならばさらに調査を拡め、水田址、方形周溝墓等が発見され、集落構成の解明がなされるとともに、遺跡の保存も進めて行くことが今後の課題である。

あ と が き

足かけ3年におよぶ長い調査の間には、種々難題が持ち上がり、そのたびに幾多の人々からご助力を賜ったことか。現場の砂ボコリ、市道の閉鎖、ガス管の破損等、生活をおびやかすような事態に周辺のみなさん、鉄対委員のみなさんをはじめ、市都市計画課、市教委の関係者のみなさんには多大なご迷惑をおかけしてしまった。おくればせながらあらためてお詫び申し上げたい。また、国鉄岡谷工事区赤星輝明区長、奥村進市助役、長野工事事務所佐藤利吉、広瀬勝の諸氏には、調査計画の当初から完了するまでともにこの大事業を推進していただき、青木建設には重機の拝借に度重なる無理をお願いした。あらためて御礼申し上げる。そしてなによりも、暑い中、寒い中を困難な仕事に従事いただいた作業員の諸氏には特に感謝申し上げる。

報告書をまとめるにあたっては、諏訪地方には数少ない弥生時代の集落址ということでもあり、おのずと弥生研究の先進地域の成果を参考にさせてもらった。とくに、県教委樋口昇一、桐原健、関孝一、笹沢浩、高森町高森中学校宮沢恒之、上松町上松中学校神村透、長野市教委矢口忠良、飯田市教委小林正春の諸先生方には、弥生土器の分類、比較、資料提供に適切なアドバイスとご協力をいただいた。そして、信大農学部氏原暉男助教授には炭化種子類の同定を心よく承諾いただき、立派な報告をいただくことができた。厚く御礼申し上げる。

また、2年余の長い間、調査・整理の最も大切な記録・遺物実測の一切を担当してくれた山崎勝彦、花村鈴江、野沢明子、田中未央子、山田武文の諸氏がいなかったら、この大事業はいまだ完了していなかったことは明らかである。そして発掘に参加した若い学生諸君が資料の分析に努めてくれたが、住居址の分析は小沢由香里、亀割均、土器の分類は三上徹也氏によるところが大きい。この若者達の労が大であったことをここに記して、御礼にかえさせていただく。

ところで報告書作成にあたっては、遺物の整理、保管を第一に心がけ、土器はできるだけ石コウ復原し、遺物の実測図は遺構単位にカード化して作成し遺物台帳としたが、こうした作業を優先したため、報告書の図版作成が大巾に遅れ、遺構・遺物の十分な検討ができず、資料の提示を主とする内容になってしまった。原稿の執筆、遺物観察表の作成はわずか1ヶ月という短期間になってしまい、調査員の先生方には原稿執筆にたいへんご苦勞をおかけしてしまった。また作成した遺物分布図、遺構、遺物写真のすべてを掲載できなかったことなど、これらは偏見に短期間の整理ということに原因したと反省している。これだけの規模の調査、整理にはそれなりの体制と期間が必要であることを痛感したが、この報告書が今後の調査や遺跡保護に生かされれば幸である。

終りに、本書の出版に際し、備前信三浦昇平氏のご理解あるご協力に、厚く感謝申し上げます。

橋原遺跡調査団長 伊藤正和

原稿執筆分担

第三章 遺 構

1・49・50・32・41・36・54・15・31・33号住居址	武藤雄六
34・44・46・48・6・51・47・35・19・7号住居址	宮坂光昭
20・55・56・21・39・40・58・8・68・69・70号住居址	河西清光
22・9・14・65・11・66・67・12・18・25・	
26・27・38・45・52・53・23号住居址	岡田正彦
62・16・61・63・64・10・43号住居址、葉石址、 小竪穴、竪穴状遺構、第三区低地の発掘区	細川光貞
24・2・4・37・60・17・57号住居址	会田 進
3・28・29・5・59号住居址、溝2・溝3	高林重水

第四章 遺 物

縄文土器	宮坂茂樹
弥生土器	高林重水
石 器	河西清光 会田 進
平安時代以降の遺物	岡田正彦
植物遺体	細川光貞

第五章 調査のまとめ

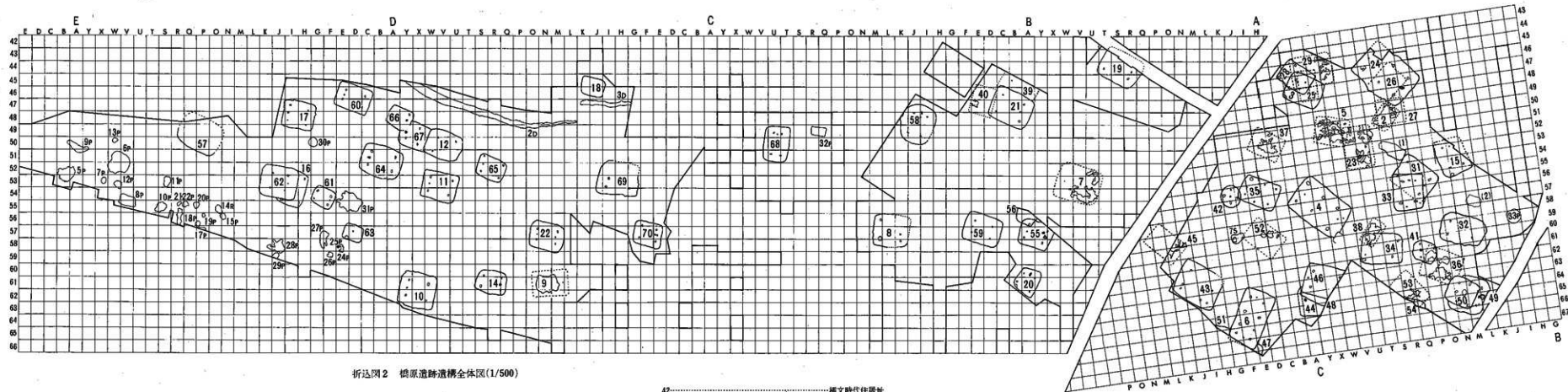
石 庖 丁	河西清光
砥石、砧石	武藤雄六
紡錘車と土器片円板、小形手捏土器	宮坂光昭
弥生土器	高林重水
弥生時代住居址と集落	会田 進
3項、住居址竪穴内出土遺物の位置	亀割 均
橘原遺跡における古代以降の様相	岡田正彦

第六章 橘原遺跡における植物遺体からみた古代の農耕文化

氏原暉男
川合 徹

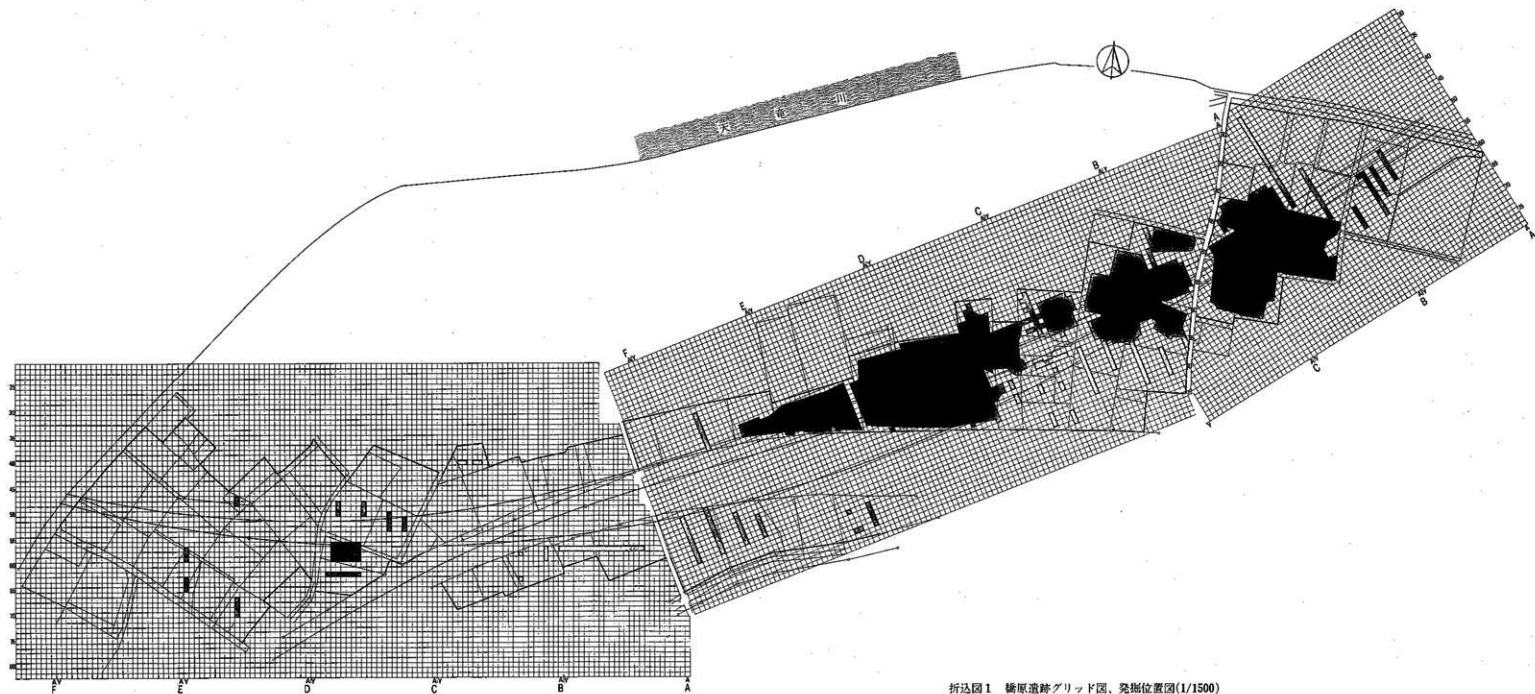
結 語

伊藤正和



折込图2 横原遺跡遺構全体図(1/500)

- 42.....縄文時代住居址
- 1~12-14-17-19~22-24-28-29
- 31~37-39-41-43-44-46-51 }.....弥生時代住居址
- 54-70
- 18-23-25~27-38-45-52-53.....平安時代中頃
-中世住居址
- 5 p ~ 33 p.....小形穴(土埴)
- 2 D ~ 3 D.....溝(弥生時代)
- 7 g.....集約址(屋外炉、弥生時代)



折込図1 橋原通跡グリッド図、発掘位置図(1/1500)
 (黒印……発掘グリッド)



写真2 南上空から見た発掘現場、上は天竜川、下は旧線路



写真3 北上空から見た住居址群（西群）



写真4 住居址群（西群）を東から見る、前方は川岸三沢区の家並



写真5 42号住居址(縄文時代)



写真6 49・50号住居址(弥生時代、以下同七)



写真7、8 32号住居址壁際の粘土（左）と炭化材、焼土、壺、甗の出土状態（右）



写真9 32号住居址



写真10 15号住居址



写真11 34号住居址



写真12、13 24号住居址の遺物出土状態（左）と壁際の砥石（右）



写真14 24号住居址

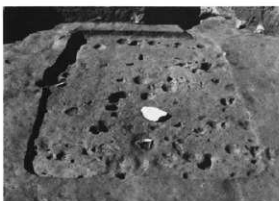


写真15、16 28号住居址（左）、南西コーナーのピットとその底部から出土した小形手捏土器（右）



写真17 35号住居址



写真18 35号住居址の埋喪炉と器台

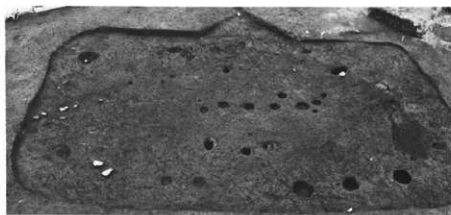


写真19 4号住居址

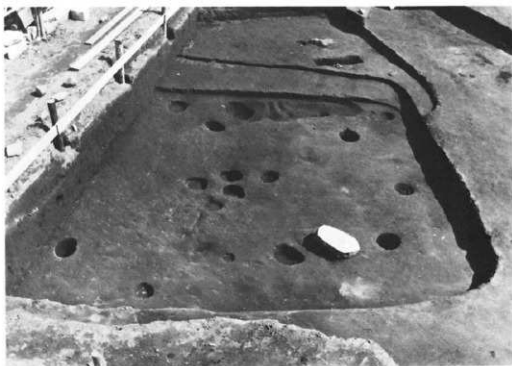


写真20 46号住居址（手前）と48・44号住居址



写真21 6号住居址



写真22 51号住居址の土器出土状態



写真23 43号住居址

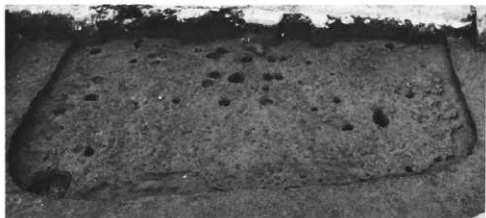


写真24 19号住居址



写真25 55号住居址の床面に散在する土器



写真26 55号住居址



写真27 59号住居址の遺物出土状態（上・下）

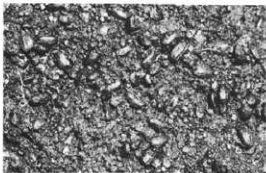


写真28 覆土中に含まれる炭化米粒



写真29 炭化した柄に着いた磨製石斧



写真30 砦南西の裏



写真31 裏の上に被さる炭化した茅

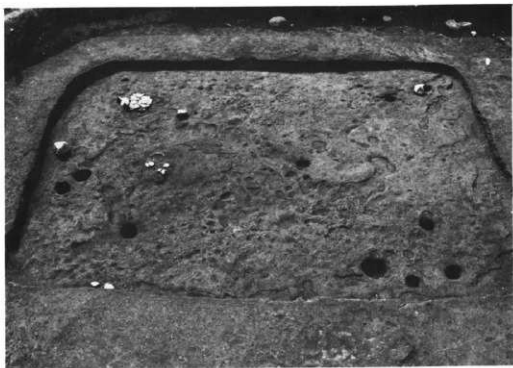


写真32 完掘された59号住居址



写真33 21号住居址



写真34 58号住居址



写真35 8号住居址壁際のピットとその中から出土した小彩手捏土器

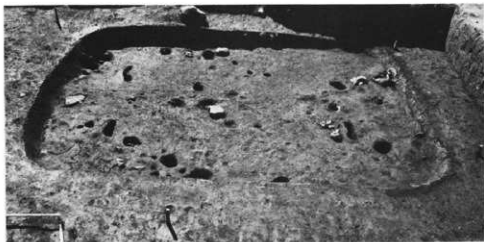


写真36 68号住居址



写真37 68号住居址炉周辺の土器(甕)出土状態

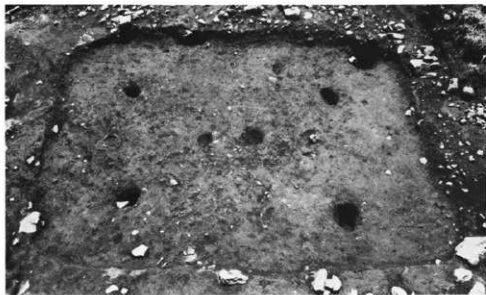


写真38 硬層を掘りこんで造られた70号住居址



写真39 70号住居址床面の土器出土状態



写真40 69号住居址



写真41 22号住居址



写真42 14号住居址の整穴内に落ちこんだ大小の礫



写真43 礫を取り除いた14号住居址



写真44 10号住居址

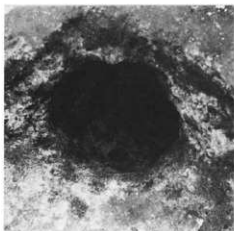


写真45 10号住居址南西コーナーの袋状ピット



写真46 10号住居址床上の礫と土器

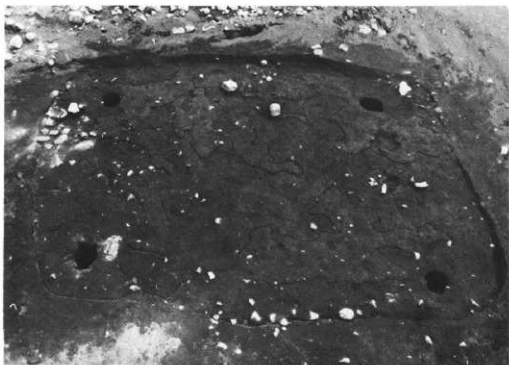


写真47 65号住居址

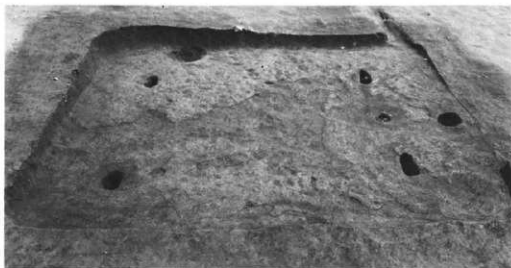


写真48 11号住居址



写真49 重複する3棟の住居址（手前から12・67・66号住居址）

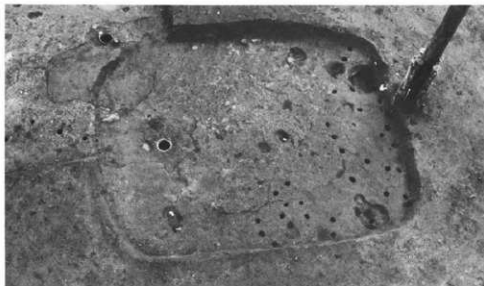


写真50 66号住居址



写真51 12号住居址の竪穴内にみられた大小多数の礫



写真52 12号住居址壁際の粘土

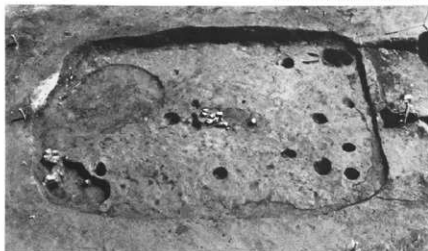


写真53 12号住居址



写真54 63号住居址、床上の土器と礫



写真55 63号住居址東壁の
小形手捏土器

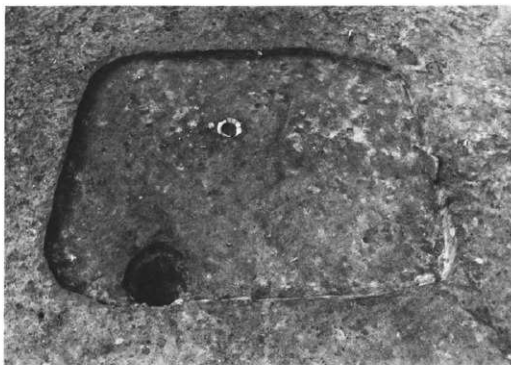


写真56 完掘された63号住居址



写真57 60号住居址

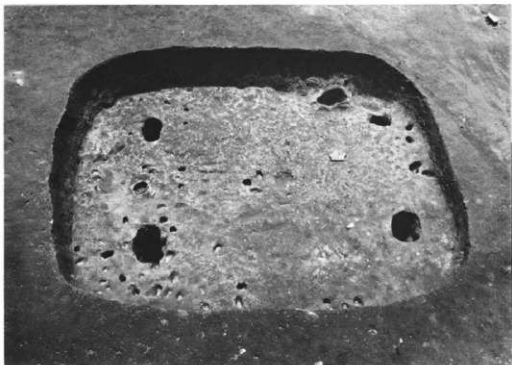


写真58 61号住居址



写真59 17号住居址、炉の西側に出土した土器と硯石



写真60 17号住居址



写真61 62号住居址の遺物出土状態



写真62 62号住居址（高坏）



写真63 61号住居址（左）と、重複する16・62号住居址（右）

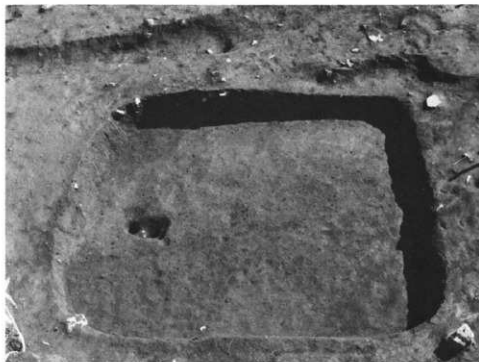


写真64 18号住居址



写真65 39号住居址埋裏炉の土器側面



写真66 6号住居址埋裏炉



写真67 49号住居址埋裏炉の底部まである土器



写真68 24号住居址埋裏炉



写真69 24号住居址炉辺石と土器の側面



写真70 58号住居址埋裏炉、土器の中に土器片を敷き詰めている



写真71 3号住居址柱穴内に逆さに入りこんだ土器(壺)



写真72 第三区低地発掘区の土層断面



写真73 第田区低地発掘区の植物遺体、手前下の中央に写真74の土器が見える



写真74 同区砂層上面の土器



写真75 東西に延びる溝 (No.2)



写真76 打製石斧 (短冊形)



写真77 打製石斧 (短冊形)

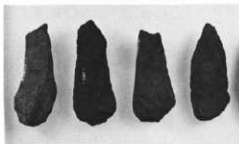


写真78 打製石斧 (茄子形)



写真79 打製石斧 (尖頭形)



写真80 刃部の磨耗した打製石斧



写真81 磨製石斧



写真82 磨製石鏃



写真83 敲石

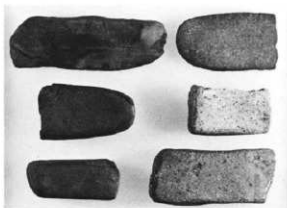


写真84 砥 石



写真85 砥 石 (24号住居址)



写真86 砥 石



写真87 石 胞 丁



写真88 砥 石

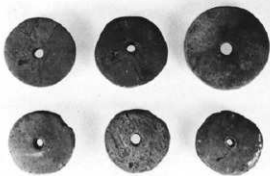


写真89 紡 錘 車

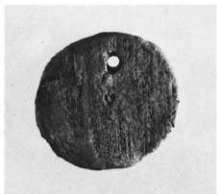


写真90 有孔土製円板



写真91 ヤリガンナ (32号住居址)



写真92 鉄 片



写真93 炭 化 米 (53号住居址)



写真94 炭 化 米 (同左)



写真95 弥生土器（左上・55号住居址、その他59号住居址）



写真96 弥生土器 (59号住居址)



写真97 弥生土器（上段・68号住居址、中下段・6号住居址）



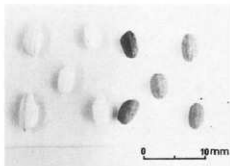
写真98 弥生土器 (左上・19号住居址、上段・67号住居址、上段右下の高環・19号住居址、中下段左と中・66号住居址、中段右・11号住居址、下段右・58号住居址)



写真99 弥生土器（上段・32号住居址、中段左・41号住居址、同中と右・65号住居址、下段左上・63号住居址、下段・62号住居址）



1. 炭化米



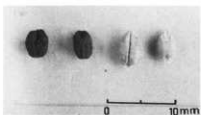
2. 炭化米と現世の米(左)



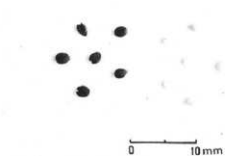
3. 炭化米



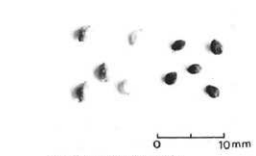
4. 炭化米糠



5. 炭化麦類と現世の大麦(右)



6. 炭化アワと現世のアワ(右)



7. 炭化ヒエと現世のヒエ(左)

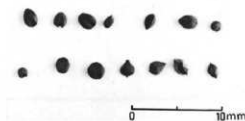
写真100 出土植物遺体類



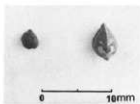
8. 炭化アサと現世のアサの実(右2)



9. 炭化エゴマと現世のエゴマ(左)



10. 炭化種子のいろいろ



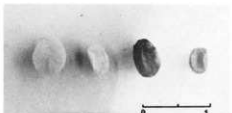
12. タデ科子実(ソバ)と現世のソバ(右)



11. 炭化種子塊



13. 炭化豆類と現世の大豆、小豆(右)



14. 現世の大豆、小豆と炭化豆類(右)



15. サクラ属の核と現世の梅の核(左)

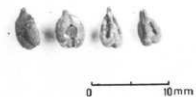


16. サクラ属の核

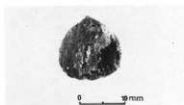
写真101 出土植物遺体類



17. 炭化モモの核と現世のヤマモモの核



18. 野生ブドウ属の種子



19. 炭化クリ



20. 炭化クルミと現世のクルミ殻(左)



21. 木の実類



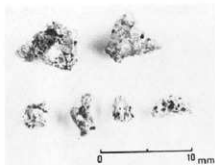
22. 木の実類



23. 木の実類

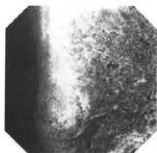


24. 木片、釋類

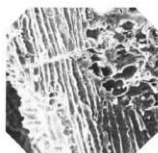


25. 骨片類

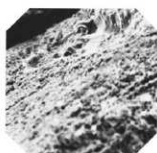
写真102 出土植物遺体類、骨片類



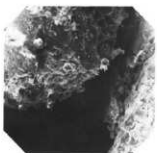
1. 炭化米 ×540



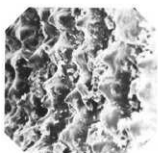
3. 炭化米 ×540



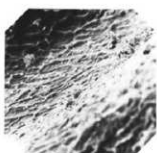
5. 炭化米 ×540



2. 現世の糠 ×540

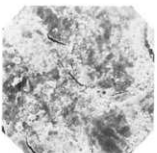


4. 現世の糠 ×540

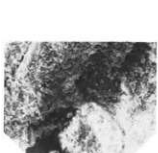


6. 現世の玄米 ×540

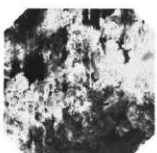
写真103 走査型電子顕微鏡による炭化米粒および現世の糠・玄米の表面構造の比較



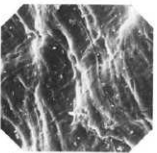
7. 炭化麦類 ×540



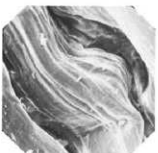
9. 炭化麦類 ×540



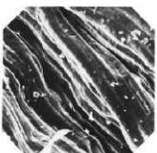
11. 炭化麦類 ×540



8. 現世の大麥 ×540

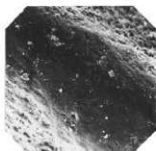


10. 現世の大麥 ×540

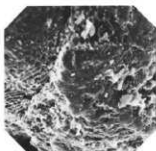


12. 現世の大麥 ×540

写真104 走査型電子顕微鏡による炭化麦類および現世の大麥粒の表面構造の比較



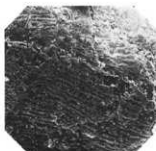
13. 炭化タンニン料 ×540



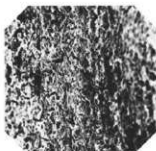
15. 炭化タンニン料 ×540



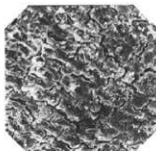
17. 炭化タンニン料 ×540



14. 現世のソバ ×250

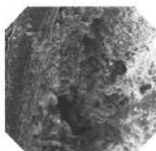


16. 現世のソバ ×540

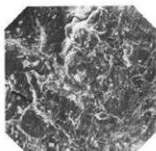


18. 現世のソバ ×540

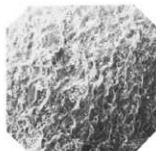
写真105 走査型電子顕微鏡による炭化タンニン料種子と現世のソバ種子の表面構造の比較



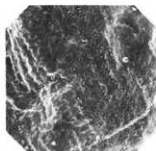
19. 炭化アワ ×540



21. 炭化ヒエ ×540



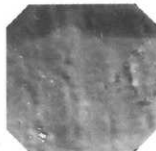
23. 炭化ヒエ ×540



20. 現世のアワ ×540

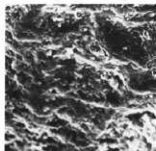


22. 現世のヒエ ×540

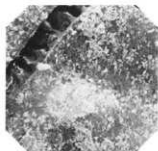


24. 現世のヒエ ×540

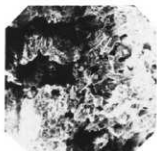
写真106 走査型電子顕微鏡による炭化雑穀類と現世の雑穀類の表面構造の比較



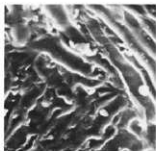
25. 炭化アサ ×540



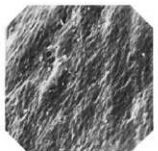
27. 炭化アサ ×540



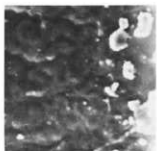
29. 炭化アサ ×540



26. 現世のアサ(皮なし) ×540

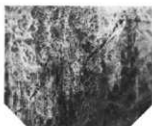


28. 現世のアサ(皮つき) ×540

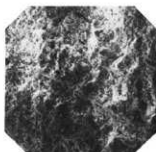


30. 現世のアサ(皮なし) ×540

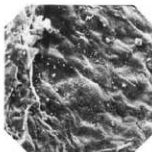
写真107 走査型電子顕微鏡による炭化アサの実と現世のアサの実の表面構造の比較



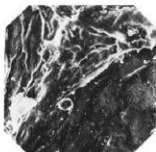
31. 炭化エゴマ ×540



33. 炭化エゴマ ×540



32. 現世のエゴマ ×540



34. 現世のエゴマ ×540

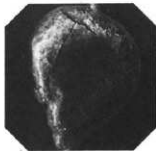
写真108 走査型電子顕微鏡による炭化エゴマと現世のエゴマの表面構造の比較



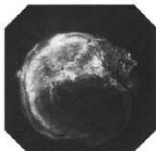
35. 炭化種子No.1 ×36



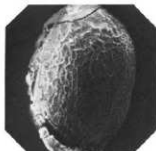
36. 炭化種子No.2 ×36



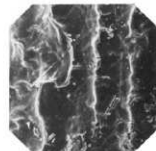
37. 炭化種子No.3 ×88



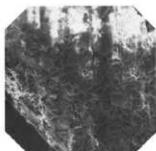
38. 炭化種子No.4 ×66



39. 炭化種子No.5 ×66



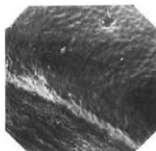
40. 炭化種子No.5部分拡大
×540



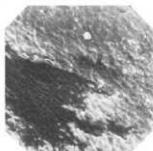
41. 炭化種子No.5部分拡大
×540



42. 炭化種子No.6 ×40



43. 炭化種子No.6部分拡大
×540



44. 炭化種子No.6部分拡大
×540

写真109 走査型電子顕微鏡による不明炭化種子の形態と表面構造

郷土の文化財 12

橋原遺跡

発行日 昭和56年3月20日
編集 橋原遺跡調査団
発行 岡谷市教育委員会
〒394 長野県岡谷市幸町8の2
TEL 02662 ③ 4811
日本国有鉄道岐阜工務局長野工事事務所
印刷 株式会社 東 信

